

昭和七年一月十二日第三編郵便物認可
昭和十四年七月十日印刷納本
昭和十四年八月一日發行
第七年 第八號
毎月一回一日發行

エスペラント

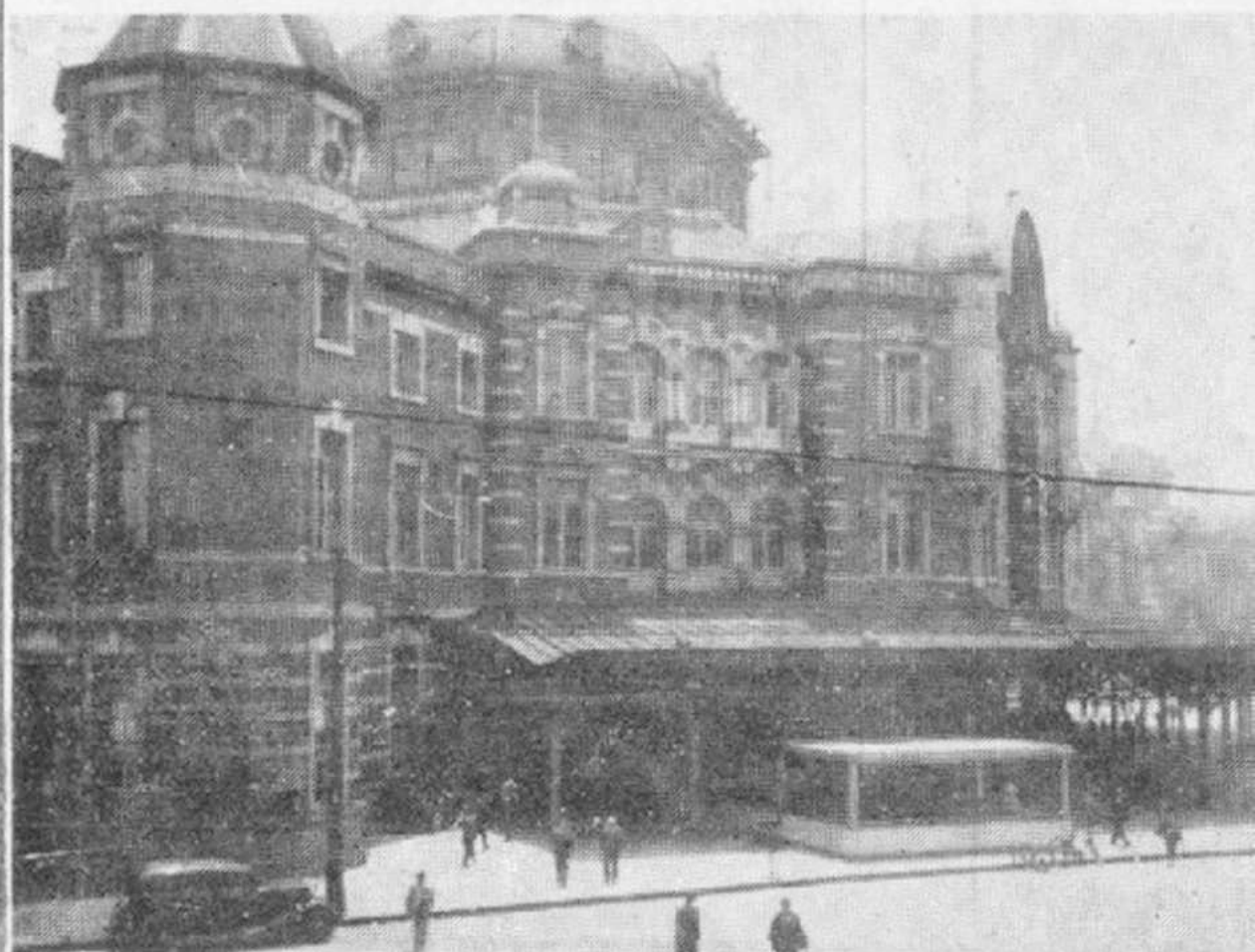
LA REVUO ORIENTA

八月號

Jaro 20 N-ro 8

Augusto

1939



財団法人 日本エスペラント學會發行圖書

學習書・教科書・辭典

		定價送料 円 銭	
エスペラント捷徑	多少外國語の素養ある人のため最良の獨習書	0.50	6
エスペラント講座	外國語を全然知らぬ人にABCから教へる講座	0.50	6
エスペラント案内	エスペラントとは何かから始め文法全般まで	0.30	3
新撰エス和辭典	語數豊富, 譯語正確, 携帶至便 上	0.80	6 並 0.60 6
新撰和エス辭典	見出語數6萬, 出典明示, 附錄豊富, 印刷鮮明	2.50	6
點字エスペラント文法と小辭典	1.00	6	
エスペラント初等讀本	0.30	3	
エスペラント中等讀本	0.30	3	
エスペラント童話讀本	0.20	3	
エスペラントの鍵	0.05	3	
エスペラント講習用書	0.30	3	
エスペラント短期講習用書	0.20	3	
イソップ物語 深切明快・脚註付	0.25	3	
ザメンホフ讀本ザ著作拔萃 I 翻譯篇, II 原作篇, III. ザメンホフ論	各 0.20	3	
	合卷 0.50	6	
エスペラント醫學文範	醫學論文の好模範, 醫學生の講習會用に最好適	0.40	3
エスペラント文例集	重要單語 720 造語例文例 0.80	6	函入カード版 1.50 14
新撰エスペラント手紙の書方	例文豊富, 書翰百科辭典の觀, 370 頁	1.20	10
エスペラント日記の書方	365日, 1日1例文, 社會萬般の記録, 譯註付	1.20	9
エスペラント發音研究	エスペラント發音上の疑問の點は何でもわかる	0.30	3
リングヴァイ・レスポンドイ	ザメンホフの質疑應答集, 學習者必備の書	0.50	6

エスペラント文庫

ザメンホフの生涯	0.40	6	國際通信の常識	0.50	3	エスペラントの會話	0.40	3
----------	------	---	---------	------	---	-----------	------	---

エスペラント文藝讀本

スラヴ篇 ツルゲネフ, チェホフ	0.25	3	フランス篇 ドオデ, ユウゴ等	0.25	3
沙翁悲劇篇 ハムレット他 3	0.30	3	北歐篇 付「アンデルセンとZ」	0.30	3

對 譯 詳 註 書

マテオ・ファルコネ メリメ作	0.30	3	代理通譯 ベルナール作	0.30	3
ハイネ詩集 珠玉の詩 40 篇	0.30	3	魔法使 ザイデル爐邊物語から	0.30	3
レイモント短篇集 2 篇	0.30	3	エスペラント童話集	0.70	3
愛あるところ神あり	トルストイ作。附「エス語研究書解題」。	282頁	1.50	9	

エスペラント書き文獻

日本書紀	I 神代紀・神武天皇紀 II 綏靖天皇紀——應神天皇紀 III 仁德天皇紀——宣化天皇紀 IV 欽明天皇紀——皇極天皇紀 I, II, III 各 1.20	9	IV 1.80	10
------	--	---	---------	----

惜しみなく愛は奪ふ 有島武郎著	0.75	6	ヴェルダ・カルト 石原榮三郎作	1.00	6
中村博士遺稿集 原作, 翻譯	0.70	6	海神丸 野上彌生子作	0.40	3
東洋の俠血兒 長谷川伸作	0.45	6	倫敦塔 夏目漱石作	0.15	3
霧の中 山本有三作ラジオ劇	0.15	3	日本民族の起源	0.10	3
佛說阿彌陀經	0.15	3	日本小史 野村佐一郎著	0.20	3
大學中庸 特	0.75	6 並 0.60	孝 經	0.30	3

歐羅巴親類廻り 上	0.95	10 並 0.85	10 國語 擁護を論じて國際語に及ぶ	0.20	3
-----------	------	-----------	--------------------	------	---

内外發行エスペラント圖書のくはしい目錄は往復はがきでお申込み次第お送りします

白水社
東京神田駿河臺下
振替東京三三三二二八

世界に誇る語學講義！
この合理性と
新鮮さを見よ！

フランス語第一步

河盛 好藏著 1.20 .10

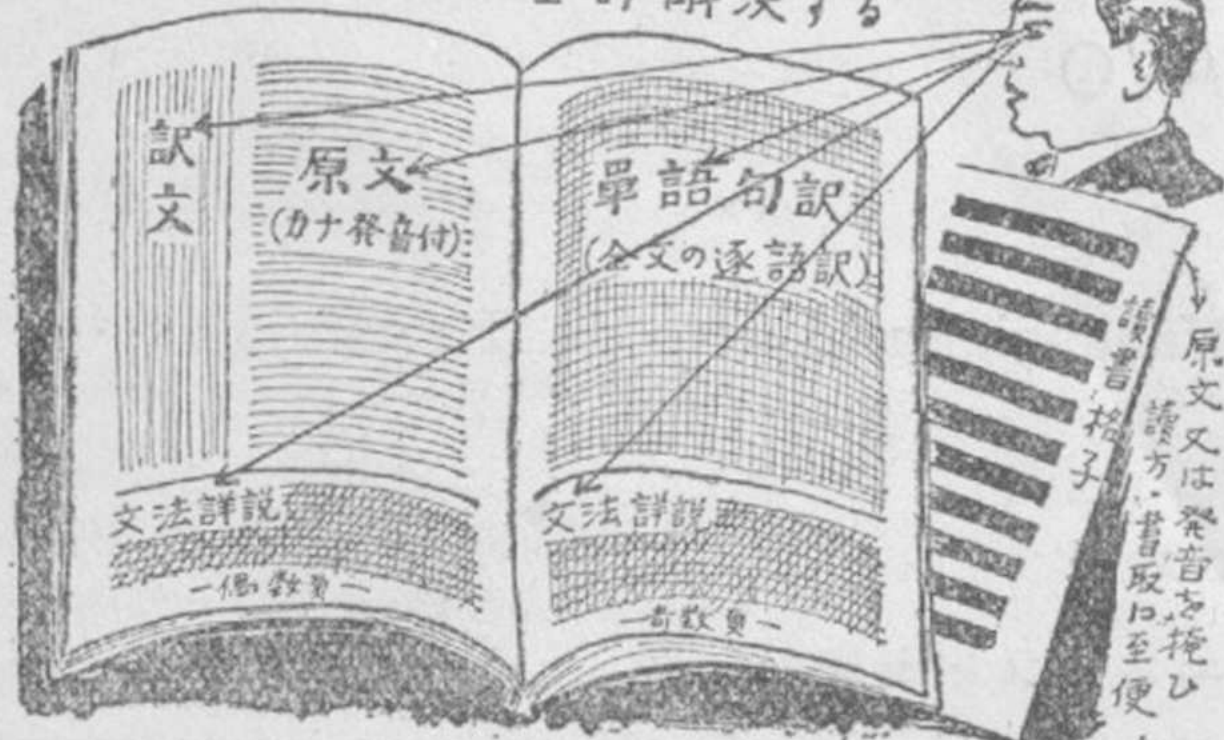
ドイツ語第一步

加藤 一郎著 1.20 .10

ロシア語第一步

除村吉太郎著 1.20 .10

一課題が一目で全部解決する



エスペラント

城戸崎益敏著

菊判・147頁・背布装

¥ 1.50 〒 .10

第一步

発音の初歩から文法全般にいたるまで、くわしく、手をさるやうに説明したうへ、興味深い読み物、日常用句から、さらに進んで、エスペラントの原作や、世界各国の名著からの翻譯の小説、戯曲、詩の拔萃十數篇を與へ親切な譯文と註解を與へる。

さらに、エスペラント學習者の知つてゐなければならぬ種々の知識も與へてあり、またこれを終つたのちの讀者についてまで述べてあるといふ行届きかたである。

この一冊を十分讀みこなせば、日本エスペラント學會のエスペラント學力檢定高等試験にも合格できるだけの實力を得ることが出来る。

イタリー語第一步 徳尾 俊彦著 1.50 .10

スペイン語第一步 佐藤 久平著 1.80 .10

ラテン語第一步 大村 雄治著 1.50 .10

エスペラント LA REVUO ORIENTA

• Aŭgusto 1939 •

表紙: El la japana arkitekturo—Tokio.
Stacidomo

扉: 大石和三郎・感謝のことば

W. Oishi: Responde al la rezolucio

LA ENHAVO

Literaturo

A. Marczell: Mallongigita historio de Hungarujo..... 10

マルツェル・ハンガリア小史

Ĉambro por virinoj

磯部幸子・日本エスペラント史の一挿話..... 18

Y. Isohe: S-ino T. Gauntlett, la plej malnova japana esperan-
tistino rakontas

Lingva Studo

岡本好次・Sur fenestro kuŝas krajono..... 2

K. Okamoto: Lingva respondo

Lernigo

伊藤己酉三・和文エス譯研究室..... 7

K. Itoo: Studo de la tradukarto

Movado

公告・普通試験施行..... 22

公告・學力検定合格者氏名..... 22

Kroniko

Mortis S-ro K. Cujuki..... 14

上田嘉三郎・惜しい露木さん

Mijake-Ŝ.: Forpasis sen bruo

岡本好次・露木清彦君を偲ぶ

萬澤まき・露木さんの思い出

LA REVUO ORIENTA..... 21

八紘之基柱—熊本案内—新獨習書—科學單位會議—各地報道—個人消
息—新聞雜誌とエスペラント—小坂賞委員會報告—本郷だより

OFICIALA PROTOKOLO DE LA XXVII-a..... 27

第 27 回日本エスペラント大會議事録

エスペラント

八月號

感謝のことば

4月29日大阪で開かれた第27回日本エスペラント大會は、神戸エスペラント協會の提出した議案：

La Kongreso akceptu Japanan Esperanto-Instituton kiel la centran organizon de la Esperanto-Movado en Japanujo.
を、最大多數を以て採擇いたしました。

本學會が大正8年に創立されましたときには、それは單に事業機關であることを標榜したのでありますが、當時の中央の指導者たちの献身的な努力は、日ならずして、全國大多數の同志諸氏の熱心な御支持を得まして、漸次、日本エスペラント運動の中央機關としての實質を備えるにいたりました。

そして、大正11年(1922年)の第14回萬國エスペラント大會に際し、ヘルシンキ協定が結ばれ、ICKが生まれまして、日本の nacia societo として、これに参加し、その後國際組織の變動に伴いまして、今日は IEL の landa asocio とゆうことになつておりますが、要するに正統の國際エスペラント運動に、日本のそれを代表して、絶えず協力し、最も健全強固なる landa asocio として、各國エスペランティストの信頼をあつめ、國威發揚の一助ともなつていたのであります。

また、大正15年7月には、財團法人となり、公的機關たるにふさわしい、強固な基礎を築きあげたのであります。

今年は、本學會が創立いたしましてから、ちょうど20年にあたりますが、この間のことを顧みますと、全國エスペラント運動の中心機關の問題に關しまして種々の議論が行われまして、中心機關設立の問題が、大會の議案としてとりあ

げられたことも幾度かありました。それらの提案は、そのたびに、うやむやになつたのであります。これは、學會が事實上の中心機關であることを、大部分の同志諸氏が認められていたからでありましょう。これが、しばしばくりかえされたのは、學會を日本エスペラント運動の中心機關と認めるとゆう積極的な意志表示が、形式をととのえてなされなかつたことに起因するのだと思ひます。

しかるに、今日、日本のエスペラント界を眺めわたしますと、全國一致して本學會を支持し、もつて新東亞建設途上のエスペラント運動を健全明朗ならしめようとゆう兆が、まことに明らかに見えるのであります。

このときにあたりまして、このような意志表示が積極的なされ、日本のエスペラント運動が、内容、形式ともに、もつとも純粹な統一を遂げるにいたりましたことは、まことに時機を得たことで、日本のエスペランティスト全員の總意のうゑに立つと見てさしつかえないと存じます。斯くて日本エスペラント學會の基礎がますます強固になり、日本エスペラント運動がいよいよ發展すべきは疑を容れぬ次第であります。

この議案を滿場一致御賛成くださいまして、多年の懸案を一舉に解決されることになりました大會參加者諸氏、また大會には出席されなかつたが、おそらくはおなじ心を持たれるであろう全國の同志諸氏、とりわけ、すすんでこれが提案をなされた神戸エスペラント協會の會員諸氏に深く感謝いたしますとともに、今後一層の御協力、御後援をお願いする次第でございます。

なお、これが提案にあたりまして、35ヶ年の長きにわたり、われわれの事業のために倦むことなくお盡しになつてられる月本喜多治氏が、特に説明の勞をとられましたことにつきまして、一段と深い敬意を表するものであります。

財團法人日本エスペラント學會
理事長 大石和三郎

Sur fenestro kuŝas krajono

問 私は去る 4 月 29 日施行された高等試験の受験者の一人であります。試験の結果は今日までまだ知るを得ませんが、R. O. 7 月號に掲載された各委員の講評はすべて至極御尤もなことばかりで、色々教えられる所であつたことを感謝しております。然しながら唯一つ文法試験 1-d. Sur fenestro kuŝas krajono の問題について一言私の疑問とする所を御質ししたいと存ずるのであります。

私はこの frazo は「誤りなし」と回答した二人のうちの一人であります。その理由は、こうゆう frazo を實際上使い得る可能性があると思つたからであります。

例えば、甲と乙とが或る ĉambro で對談中、甲が或る窓の上に鉛筆の置かれてあるのをふと發見したとします。その場合甲が乙に向い Sur fenestro kuŝas krajono といつても少しも差支えがないと思うのです。勿論部屋の窓が一つなら la を付すべきでありましょう。けれども部屋には澤山窓があると假定します。そのどれかの窓に鉛筆がのつているのが目に入つたことを相手に知らしめた場合であります。

出題には前後の關係を知る何らの手掛りもありません、従つて受験者としては、こうゆうことが實際上果していい得るか否か、色々な場合を想像して答案を書きます。私は以上のような場合には、この frazo も可能であるとの結論に達し「誤りなし」と回答したのであります。

出題は「誤りあらば正せ」とあります。既に「誤りなし」と認めたが故に、その理由は差控えたのであります。

以上の點につき何卒御垂教を願います。

(受験生)

答

岡本好次

この受験生氏と同じ様な疑問をいただく人も他にあるかもしれぬと思うし、又お互に文法的の問題について研究し頭を練ることは有意義なことであると考えるので、その解答を誌上をかりてここに發表することとした。

一般に文法については意見の相違とゆう場合も相當に多い。例えば 7 月號でものべた如く、月(曆月の)の名の如きも小文字で書き、必要の際は冠詞もつけた方が合理的だと云う如き問題については文法學者や論者によつて意見の相違がある。この相違した意見はどうしても一致しない。これはつまり意見の相違によるからである。併し又一方文法の問題にはよく慎重に考えてみると結局誰が考えても最後には同一の結論に到達するものもある。今ここに問題となつてゐるものはその後者に屬するものであると筆者は考える。

而して受験生氏の御抗議にも拘らず筆者は

Sur fenestro kuŝas krajono.

とゆう表現は論理的に見て不十分で、やはり Sur la fenestro... となおすのがただしいと思う。

唯本誌七月號の説明で尙説明が不十分であつたかもしれないが、同號で述べた「論理」とゆう言葉もむづかしく議論をいえば益々面倒になつて困るが、あれはやはり常識的に考えての論理であつて、云いかえれば我々の常識乃至常人の rezonado によつてとゆう位の意味である。

つまり筆者の云わんとするところは krajono は不定(冠詞がついていないから)であつてもいいが、その上 fenestro が不定では論理的におかしいと云いたいのである。どちらも不定であればなぜ論理的におかしいかをいへば、

Sur fenestro kuŝas krajono.

とゆう表現、即ち或る窓の上に一本の鉛筆が横わつている。とゆう表現は普通の常識では用いないとゆうのである。

受験生氏は、甲(話し手)、乙(聞き手)二人が或る ĉambro で話しあつている時(但しその ĉambro にいくつもの fenestroj があるとする)甲がその ĉambro の或る一つの窓の上に鉛筆が置かれていて、そのことを乙に話す時には

Sur fenestro kuŝas krajono.

といえよと云われる。

併し一つ氣持をおちつけてよくこのところを考えてもらいたいと思う。我々、日本人は冠詞のない國語を話していて冠詞の有無によるちがいなど我々日本人にはあまりよくわからないのである。そして冠詞をもたぬ我々が上の文を日本語に記してその譯文の様子から推論したのでは考えちがいをするかもしれない。我々は十分頭を冷靜にして論理を忘れずに考えてみたい。

扱この問題について考えてみるに、甲が乙にむかつて、或る窓に鉛筆のあることを説明する場合「あの窓」とか「その窓」とか云う表現——エス語で云えば *Sur tiu fenestro* と云う表現——を用いて云うのが普通である。即ち甲がそのその窓(又はあの窓)の上はどんな状態になつているかとゆうことを乙に知らすのがその主眼だから、その窓を指さすか眼で示すか兎に角甲がどの窓を云つてゐるのかが乙によくわかる様な身振 (gesto) を雜えて、

Sur tiu fenestro kuŝas krajono.

と表現するのが當然である。(甲乙が或る窓について話しあつていて、その窓が兩者によくわかつてゐる場合は *tiu* の代りに冠詞 *la* を用いて *Sur la fenestro kuŝas krajono.* と表現するにちがいない)。

fenestro の上に *krajono* があるとゆうことはありふれたことではない。このありふれない *fenestro* と *krajono* 兩者の關係を示すのだから、どの *fenestro* に *krajono* があるかをハッキリしめすのが當然(即ち *Sur tiu fenestro* とゆうのが當然)である。

この際甲が *Sur tiu fenestro* と云わないで、*Sur fenestro* と云つたのでは、乙にはどの *fenestro* のことをいつているのかサツパリ見當がつかないことになる。いわば判じ物か謎々みたいに聞える。話し手が聞き手にむかつて一言何か述べるに當つて、その敘述したことが聞き手にハッキリ判斷できぬような表現をえらぶ筈はないのである。即ち *sur fenestro* といつたのでは甲がわざわざ乙にむかつて窓に鉛筆がのつてゐると話してきかせるのにそれがどの窓だと乙に理解できぬ説明では何にもならないのである。なぜかと云うに *fenestro* とゆうものは世界に無數に澤山あるので *sur fenestro* といつたからといつてその部屋のどれかの窓とゆうことにはならないのだからである。だから、

Sur fenestro kuŝas krajono.

では、どこかしらんがどこかの或る窓に鉛筆がのつてゐるとゆうので、ある夢のやうな漠然とした表現になつてしまつて甲が乙に何を云おうとしているのか理解できないことになる。別の例で云つてみれば甲が乙にむかつて、

Tiu instruisto mortis hieraŭ.

といえよ、どの先生 (*instruisto*) が昨日死んだか乙にわかるが、これを

Instruisto mortis hieraŭ.

といつたのでは、どこの先生が昨日死んだのか乙にはわからない。廣い世界だから先生も一日には何人も何十人も死ぬだろう。だから甲が乙に *Instruisto mortis* といつただけでは乙は何の關心ももちえないし又どの先生のことかサツパリわからない。*Tiu instruisto* といつてこそ始めてわかるのである。即ちこの際 *Tiu* のない表現は文法的に論理的に成立し得ないといつてよい。前の問題に戻つて、かりに甲が乙にむかつてはつきりとどの窓とさし示さないで唯「この部屋のどれか一つの窓に鉛筆がのつてゐるよ」とゆう意味のことを表現しようとするにしても、その際は少くとも

Sur unu el la fenestroj (de tiu ĉambro) kuŝas krajono.

とゆう表現をとるべきでこのことを簡単に

Sur fenestro kuŝas krajono.

て表わすとしたら、それは亂暴な話である。單に *Sur fenestro* といつたのでは、上にのべた如く、その部屋の *fenestroj* 中の一つをさすというわけにはならない。この部屋以外にもいくらか *fenestroj* があるのだから *tiu fenestro* と云うか *unu el la fenestroj de l' ĉambro* とゆう云い方をしないで、唯 *fenestro* だけではこの部屋以外のどれかの窓を意味するものと乙が想像したとしてもやむをえないのである。それでは甲が今乙に云わんとしたところとくいちがうわけである。だから普通の常識で考えれば如何なる場合でも甲は決して *Sur fenestro...* とゆう様な曖昧な表現を用いる筈がないわけである。しかし我々日本人が何だか *Sur fenestro* でもよさそうな錯覺をおこすのは、日本人は冠詞の用法とゆうものを知らないからである。上述の如く名詞の前に冠詞の有るなしによつてどれだけ意味のちがいがおこるかは日本人にピンとこないのはやむをえない。冠詞をもつヨーロッパ人は無意識の中にまちがわないのだが、日本人は意識して却つてまちがう。ヨーロッパ人は上の様な場合きつと *sur tiu fenestro* か *sur la fenestro* とゆう表現をして *sur fenestro* とゆう風なことはまず云わない。それは彼等は自國語の中でこんな定冠詞を用いる表現を毎日何回となくくりかえしているが、定冠詞のない表現は一度も用いないのだからその自國語の経験ですぐ誤なく用いる。(エス語には定冠詞 *la* に對して不定冠詞がないが自然語には不定冠詞もあるからここではわざと定冠詞と云つた) 日本人は冠詞に何の関係もない日本語を話しているのだから、その邊の呼吸がのみこめないのである。そして机上の理窟だけ考えて、つい誤つた謬想に陥るのである。

別の方面から更に考えてみよう。お伽噺の書き出しで「昔々或る(ところの)窓に一本の鉛筆がのつていましたとさ」式の表現には

Iam sur fenestro kuŝis krajono.

とゆう表現は可能である。この際 *Iam sur iu fenestro...* と *fenestro* の前に *iu* をおくとハッキリするが、これを略して唯 *sur fenestro* として云う場合もある。しかしこの *iam* を取去り *kuŝis* の過去形を現在形にかえ

Sur fenestro kuŝas krajono.

とゆう表現は可能かとゆうにやはりこうすると上に述べた如く

どこか或る窓に鉛筆がのつている。

とゆう意味となつてどの窓のことをいつているのかわからぬことになり、茫漠として謎々のようになつてしまうとゆうことは前にのべた通りである。*kuŝis* が過去形ならお伽噺の書き出しの表現になる(その際 *iam* を省いてもよい)。お伽噺の書き出しは謎々のものである。それにつづいて話が發展してゆくのだから。しかし甲乙對談中その部屋のどれか一つの窓の状態を話すのに茫漠としてとらまえどころのないようなこんな表現は用いられない。詳しくいえば文法上云えないとゆうのでなく、そんな漠然とした表現では聞き手に十分のみこめぬから不十分な表現なのである。

ここでも別の例を以て示してみよう。

「昔お爺さんとお婆さんとがありました」を

Iam vivis maljunulo kaj maljunulino.

とゆうとお伽噺の書き出しにはなるが、この *vivis* を現在形に改め且つ *iam* を取除いて

Vivas maljunulo kaj maljunulino.

(お爺さんとお婆さんがいる)。

としたのでは、どこにお爺さんとお婆さんがいるのか、どのお爺さんとお婆さんのことを云つているのか茫漠として、つかみどころがなくなる。過去の形を用いたとて茫漠としてゐることには變りはないが、上述の如くお伽噺の書き出しはこんな茫漠たるところから始まるのだ。しかし一般の會話——現實の——ではそんな茫漠とした夢のような謎の様な表現をしないのである。

即ち *Sur fenestro kuŝas krajono.*

とゆう表現も茫漠たる表現で甲が乙に態々云うのにこういつては全く用をなさないのである。*Sur la fenestro* と *la* を一つ入れただけでひきしめる。だから單に *sur fenestro* といつた風な表現は普通用うべき表現でないのである。又もう一つ別の方面からこれを検討してみよう。

Sur fenestro と *fenestro* の前に冠詞も何もおかない際は普通上にのべた如く、どこか

の或る一つの fenestro とゆう意味にとることもあるが、又別にどの fenestro でも fenestro ならよい（即ち前者では fenestro の前に iu とか unu とか置いて考えてよいのだが、後者では fenestro の前に ĉiu とか iu ajn とかを置いて考えてよい場合である。）とゆう意味をもたせてもよい。

では

Sur fenestro kuŝas krajono.

の文に於てこの sur fenestro を後者の意味に解釋して、この表現が可能かを考えてみるのに

Sur {iu ajn fenestro } kuŝas krajono.
{ĉiu fenestro }

は論理的に不合理である。これではどの窓でも窓ならば、その上に鉛筆があるとゆうことになるからである。窓の上に鉛筆がのつていとゆうことは稀なことである。これが fenestro と krajono の如く何等密接な関係をもつていないものの時はこういつた表現が變(不合理)であるが fiŝo と rivero, inko と inkujo の如く密接不離の関係にある二つの事物の場合なら、上の様な表現も可能である。例えば

En rivero naĝas fiŝoj.

(川には魚がいる)。

En inkujo sin trovas inko.

(インキ壺にはインキが入っている)。

は決して茫漠とした表現とゆうことはできない。これらの表現はこれだけで立派に獨立している。この際

En la rivero naĝas fiŝoj.

En la inkujo sin trovas inko.

とゆう表現にかえてみると、又全く別の意味にもなる。(冠詞をつけた名詞が代表單數を示す時は la のない時と殆ど同じ意味をもつが、この la が甲乙兩者にわかっている特定の一つをさすものとすれば、全く別個の意味になる。)

かくいろいろの方面から考えてみても

Sur fenestro kuŝas krajono.

とゆう表現は論理的に不十分であることはまぬかれない。而してこの表現は常識を以て考える時は、誰にも用いられるべき表現ではな

い。だから論理上誤と見做し、又従つて文法上誤と考えるのは毫も差支えないことである。

而して fenestro の前に la を加えることによつて、この表現は完全に論理的なものになる。

Sur la fenestro kuŝas krajono.

だから、高等試験の問題に出してみたのである。

ところで fenestro のみならず krajono も甲乙兩者にわかっている時は、

Sur la fenestro kuŝas la krajono.

(la の代りに tiu その他の指示詞を加ゆるもよい。)とする。

ところで krajono を特定とし fenestro を不定とした

Sur fenestro kuŝas la krajono.

とゆう表現をみてみるに、これは甲乙が知っている krajono の所在について甲が乙に話す以上は「その鉛筆はどこそこの窓の上にある」と説明するのだから、その窓は何か特定の意味を示す言葉(例えば tiu fenestro とか unu el la fenestroj) をつけておかぬと論理上まづいと思う。

かく考えてみると、要するに fenestro に krajono がのつている関係に於て fenestro が不定の

{Sur fenestro kuŝas krajono. (1)

{Sur fenestro kuŝas la krajono. (2)

なる表現は、どちらも論理上誤といつてよく、唯

{Sur la fenestro kuŝas krajono. (3)

{Sur la fenestro kuŝas la krajono. (4)

のどちらも論理上正しいこととなる。

この (3) (4) の表現は共に Ekzercaro の § (6) に出ている。即ち § (6) が

La libro estas sur la tablo, kaj la krajono kuŝas sur la fenestro.

Sur la fenestro kuŝas krajono kaj plumo.

がある。これは全く (3) (4) と同じ形のもので、唯一部分よけいなものが附加されているにすぎない。

尙 Ekzercaro 中に (3) (4) の形と相似の表現をさがしてみると一寸氣づいただけでも

次の如く澤山存在する。

La libro estas sur *la* tablo, kaj la kra-
jono kuŝas sur *la* fenestro. (§ 6)

Sur *la* fenestro kuŝas krajono kaj
plumo. (§ 6)

La filo staras apud *la* patro. (§ 8)

Antaŭ *la* domo staras arbo. (§ 8)

La patro estas en *la* ĉambro. (§ 8)

Blanka papero kuŝas sur *la* tablo. (§ 10)

Sur *la* ĉielo staras la bela suno. (§ 10)

Ili estas en *la* ĝardeno. (§ 16)

Ili ankaŭ estas en *la* ĝardeno. (§ 16)

Ili kuŝas sur *la* tablo. (§ 16)

Sur *la* kameno inter du potoj staras
fera kaldrono. (§ 25)

...tra *la* fenestro, kiu sin trovas apud
la pordo, ... (§ 25)

Super *la* tero sin trovas aero. (§ 26)

Mi staras ekster *la* domo, kaj li estas
interne. (§ 26)

En *la* salono estis neniuj krom li kaj
lia fianĉino. (§ 26)

Kiam li estis ĉe mi, li staris tutan
horon apud *la* fenestro. (§ 26)

La fera bastono, kiu kuŝis en *la* forno,
... (§ 31)

Sur *la* bordo de la maro staris amaso
de homoj. (§ 31)

Sur *la* arbo sin trovis multe (aŭ multo)
da birdoj. (§ 31)

Li staras supre sur *la* monto kaj...
(§ 33)

Sur *la* korto staras koko kun tri
kokinoj. (§ 33)

Sur *la* tablo staras diversaj sukeraĵoj.
(§ 35)

La gefianĉoj staris apud *la* altaro. (§ 36)

Li sidas apud *la* tablo kaj dormetas. (§ 38)
これは一寸眼についただけである。この外に
もまだあると思う。これらの例を見るとすべ
て冠詞がついていることがわかる。尤も他の
語が既に特定を示しているので冠詞が用いて
ない次の如き例もある(これは少いが)。(特
定を示す語を斜體とす)。

En unu tago, kiam ŝi estis apud *tiu*
fonto, ... (§ 15)

En *mia* skribotablo sin trovas kvar
tirkeŝtoj. (§ 31)

Sur *tiu* ĉi vastaj kaj herboriĉaj kampoj
paŝtas sin grandaj brutaroj... (§ 34)

En *tiu* ĉi boteletoj sin trovas diversaj
acidoj... (§ 35)

即ちここにあげた約 30 個の用例を見るに
前置詞のついた名詞には(上の fenestro に
當る名詞)必ず冠詞 *la* (又は他の指示詞)が
ついている。即ち上の (3) (4) と同一の形で
ある。そして兩方の名詞(fenestro と krajono
に當る名詞)が共に不定(冠詞がつかぬ)で
ある用例(上の (1) (2) の例)は Ekzercaro
にはないといつてよい。

實は唯一つ § 32 に

Alportu al mi metron da nigra drapo
(Metro de drapo signifus *metron*, kiu
kuŝis sur drapo, aŭ kiu estas uzata por
drapo).

とゆうのがあるが、ここでは sur drapo と
drapo が不定であるが、これは上に一寸のべ
た例外的のもので、drapo 用の metro (物尺)
は drapo の上にのせてはかるもの故通常
drapo の上におかれているもので drapo と
metro は密接不離のものであつて上にのべた

En inkujo sin trovas inko.

と同じ用例と見てよいからこれを Sur fene-
stro kuŝas fenestro の用例と見ることができ
ない。

以上の議論によつて

Sur fenestro kuŝas krajono.

とゆう表現は論理的に十分でないと思へる
と思う。以外の場合の用例をエス書の中でも
発見された節はおきかせ願いたいと思う。き
つとそんなものはないと信ずるが。

尙もし又この説明でも十分理解できない方
は再度その疑問とするところを摘記の上御質
疑を學會宛でお送り下さい。小生は何度でも
お答え致します。又別の問題についても——
高等試験の文法問題のみならずその他の問題
でも(又受験されたものも、そうでないもの
でも結構)——疑義があればお尋ね下さい。

和文エス譯研究會

指導者 A 氏

會員 B, C, D, E, F 氏

A: 暑くなりましたね。和文エス譯みたい
に唯さえ頭が熱くなるような仕事は夏向きで
はありませんが、一汗かいた後はさっぱりし
てよかろうと思います。

問題 A は

前駐米大使齋藤博氏の遺骨を載せた
アストリア號は4月17日横濱に入港し、
日米親善の實を挙げた。

です。「前駐米大使」はどう譯したらよいで
しょう？

C: 前大使は eksambasadoro で間違いない
でしょう。駐米は rezidanta en Ameriko
とすればよいではありませんか。

E: Ameriko より Usono がよいと思ひ
ます。それから rezidanta は rezidinta でな
ければいけませんまい。

B: rezidi を使わなくても al Usono だ
けでよいではありませんか。英語では to
United States ですから。

D: sendita al Usono の意味なら al でよ
いでしょうが、rezidinta en Usono なら en
を使うべきだと思います。

A: rezidi は或る所に永く住むことで、英、
獨、佛語等にありますが、必ずしも駐割する
意味にばかり使われるとは限りません。しか
しエスペラントでは主として駐割する即ち役
人が職務上或る土地に住むことに使われるよ
うです。駐米大使の駐を rezidi で譯してよい
か否かは疑問で、rezidi en Vaŝingtono なら
ばよいのですが rezidi en Usono とは言わ
ないようです。Boirac の辭書には kutime
enloĝi とあり、獨逸語の辭書には都會に住む
とあります。従つてどうも住んでいる都會に

關して使う言葉らしい
のです。英語流に言え
ば eksambasadoro al
Usono ですが、この場
合 ambasadoro は sen-
dito であります。am-
basadoro を reprezen-
tanto と考えれば en

Usono としてよいわけで、又 ĉe としてもよ
いと思います。「遺骨」はどうですか。

D: cindro がよいではありませんか。

F: cindro は灰ですから ostoj の方がよ
さそうに思います。

C: kadavro はいけませんか。

A: kadavro は死骸です。cindro は灰に
は違いありませんが、人間を茶毘に付した灰
を cindro と言います。遺骨は ostoj と言う
よりは cindro de ostoj ですから、cindro と
するのが普通でしょう。「入港する」は？

B: eniri en havenon は平凡過ぎますか。

E: alveni la havenon はどうでしょう。

C: enhaveniĝi がよいではありません
か。

A: eniri en havenon 即ち enhaveniĝi で
何方でもよろしい。この後は大分難しくなり
ますが、「親善の實をあげる」はどう譯したら
よいでしょう。

E: efektiviĝi la amikan interrilaton で
は？

B: 私もそう思います。

A: 親善關係を實現するとゆうわけです
ね。他にありませんか。

D: pruvi pri la amika rilato は如何です
か。

A: pruvi は他動詞ですから目的格を用い
なければなりません、しつくりしません。

F: rikolti la frukton de interamikiĝo は
變ですか。

C: 私は fini sian mision de amika in-
terrilato と考えましたが。

A: interrilato は interrilatigo としなけ
ればならないでしょうが、親善の使命を終え
たとなつて多少意味が違ふようです。rikolti
la frukton も感心出来ません。此場合は日米

親善に對して大いに貢獻したとゆう意味に解釋してもよいのではないのでしょうか。そうすれば fari multon por la interamikiĝo となります。親善關係を實現するとするならば starigi la amikan rilaton の方が efektivigi よりよいと思います。又親善的感情を更に深めるとゆう意味で plifirmigi la amikan senton としてもよいでしょう。

これでこの文は出来るわけで、文の構成の點では殆んど問題はないと思いますが、例によつて文を作つてみて頂きましょう。

「アストリア」は Astoria です。

Astoria enŝipiginta la cindron de mortinta S-ro Saito-Siroŝi, la eksambasadoro en Usono, enhaveniĝis en Jokohama la 17-an de aprilo, kaj starigis la amikan rilaton inter Japanujo kaj Usono.

大體よいようですが一個所訂正する必要があるようですね。

E: enŝipiginta ではありませんか。

A: そうです。人が積込むのですから、enŝipigi を使うならば en kiun oni enŝipigis としなければならなくなりますが、これではアストリヤ 號は遺骨を送るのが目的でなく序に遺骨を積込んだような感じになります。portanta とでもしたらよいでしょう。

次は

Numero Astoria, kiu enŝipigis la cindron de la eksambasadoro al Usono S-ro Saito Hiroŝi, en la havenon de Jokohama en la 17-a tago de Aprilo, kaj starigis la amikan interrilton japan-usonan.

ですが、アストリヤ 號の號は numero ではありません。艦の名前であることを示す爲に號を付けたので、Astoria だけでよいのです。La militŝipo (krozŝipo) Astoria としてもよろしい。enŝipigis は前に申しましたようによくありません。それから人名は姓を前にする時は interstreketo - を付けるのが普通です。japan-usona はやはり inter Japanujo kaj

Usono とすべきでしょう。日獨協定だとか日支紛争だとか半固有名詞的な場合には japan-germana, japan-ĉina 等しますが。

この問題はこの位でよいでしょう。結局次の様な譯となります。

La (milit)ŝipo, Astoria, portanta la cindron de la eksambasadoro ĉe Usono, S-ro Hiroŝi Saito, eniris la havenon Jokohama kaj pligrandigis la amikan senton inter Japanujo kaj Usono.

次の問題は

この小説は私の趣味に合わない。もつと高尚なものなら譯す氣になるんだが。

です。これもあまり難しい點はありません。「趣味に合う」と「……する氣になる」だけです。

先ず「小説」ですが、之は誰方も先づ novelo をお考えになるでしょう。

E: romano と novelo とはどう違いますか。

A: romano は空想で作上げた散文の長い詩的物語で、主人公を巡つて起る種々の出來事を叙述したものです。novelo は實生活から取材して人の性格とか行動とかを描寫したものです。例えば夏目漱石の小説は novelo で、最近の流行作家の長編小説等は romano と言えましょう。此處では何方でもよろしい。「趣味」はどうですか。

B: gusto がよいと思います。

F: intereso はどうですか。

A: intereso は興味です。gusto は物が持つ味ばかりでなく、味を感じる能力、趣味、好趣味の意味があります。

「趣味に合う」とゆうのはどうすればよいでしょう。

D: plaĉi al gusto でよくはありませんか。

C: koincidi を使つては如何ですか。

B: taŭgi の方がよいように思いますが。

F: 私も taŭgi al gusto を考えていました。

A: koincidi は「一致する」ですからよいようですが、この場合にはあまりに精密過ぎ

る感があります。esti konforma も同様です。taŭgi は「役に立つ、間に合ふ」ですからいけません。plaĉi al gusto か esti laŭ gusto がよろしい。

「高尚な」は一寸譯し難い言葉ですが適譯がありますか。

B: nobla では。

A: この文の「高尚」は nobla ばかりでもないでしょう。

E: bongusta の方がよいでしょうか。

A: まあそんな所ででしょうか。de bona gusto としても同じです。私は de rafinita gusto (洗練された趣味) したいと思います。

「……する気になる」はどうです。

E: intenci, voli は月並かも知れませんが……

F: inklini なんかは……

A: inklini よりは inklinigi とした方がよいでしょう。

C: korinklinigi は同じではありませんか。

A: kor が付くと「心がその方に傾く」で好むとか、人に心が惹かれる等に用いられます。voli だけで物足りなければ ekvoli としたらよいでしょう。

これでこの問題も出来上りました。後半は假定で事実と反対を述べているのですから、

假定法 -us を使うことは御承知のことと思います。

Tiu ĉi novelo ne estas laŭ mia gusto. Se ĝi estus de pli rafinita gusto, mi ekvolus traduki ĝin.

但し gusto が二度も出て来るので, gusto の用例としてはよいでしょうが, 後の gusto を他の言葉で代えた方がよさそうです。そうすると altgrada, altkvalita 等が考えられますが, ピツタリしないようです。malvulgara が一番よく合うと思いますが, malbela, malbona, malalta 等のやうに mal が付くと悪い意味になる場合が多いので, malvulgara もそんな感じを起し易い, 何となく「高尚」という感じが出ない気がします。仕方ありませんから de alta rafiniteco としたらどうかと思います。即ち

Tiu ĉi novelo ne estas laŭ mia gusto. Se ĝi estus de pli alta rafiniteco, mi ekvolus traduki ĝin.

今日はやつてみると割に難しかつたようですね。感じが出るとか出ないとか或はピツタリするとかしないとか言つても皆さんにはピンと来ないことがあるだろうと思いますが, その邊の所は口で説明出来ない點で, 段々自分で會得される外はないのですから精々御勉強下さるようお願い申します。

d. akaro, Tanobe-Takaŝi.

- B. a. 佐々木久子, 紗那子.
b. Dio, 永江清, トト, Memlernanto, Militkuracisto, イマキヒデヲ, forĝisto.
c. Barono Don, T.T., 金華山, 齋藤實, 形星, Makita-S., T. Kobajasi, マサハジメ.
ĉ. G. Homma, Aĉulo, Orfiŝo, Nigrulo, Aŭtuno, 加精一, Inĵu Nakamuro, K.K., Ĉelo.

新 課 題 10月號發表

A. 3月31日を以て終る昨年度の國民總貯蓄は七十三億八千萬圓の額に達し, 政府の目標とする八十億圓に極めて近い好成績を納めた。

B. 満更知らぬ仲でもないのに, 殊更そんな意地悪をしなくてもよさそうなものだ。
(締切: 8月5日着便)

成績發表

- a. 申し分ないもの。
b. aに近いが多少不十分なもの。
c. 大體よいが少し缺點のあるもの。
ĉ. 缺點の著しいもの。
d. 文章の構成に充分研究を要す。

A. a. Sen' Ok.
b. Adepto de hebreo, Serpentokulo, 山石木三。

c. 加藤精之助, Tagiĝo, O-h, Vaporo, Metalisto, 鐘紡子, Drako, 河村義三, Konisi-Norio, Gifu-ano, Ueda-Masao, NES-ano, プロシオン, ミミ, Junulo, 緑星子, 井手尾元治, ミノル, Nohara-Nobuko.

ĉ. Toa, Seiiĉi, 増田, Tonĉju, TIMUR, M. Inaba, 只野人也, Koiĉjo.

Mallongigita historio de Hungarujo

—*Daŭrigo*

Dr. MARCZELL AŬGUSTO

Hungarlando

dum la XIV. kaj la XV. jarcentoj.

Poste kiel ĉe la germanoj, ankaŭ ĉe ni, ĉe hungaroj interregnumo (stato sen reĝo) estiĝis. Sed ĉe ni, ĉe hungaroj, feliĉe nur 8 jarojn longe.

Karolo Roberto (1308–1342) venkis intertempe la elkreskintajn kaj arbitrintajn “malgrandajn reĝojn” kaj je la fino de sia regado kiel orienteŭropa pacjuĝisto prijuĝis unuparte inter la germana kavalira ordeno kaj la pola kaj bohema reĝoj. Lia filo: Ludoviko la Granda (1341–1342) ofensiviradis kun sia triumfinta armeo en Italujon ĝis Napolo (Neapolis), poste venkis la fieran Venezion, la reĝinon de la maro, kaj venkis Kroatujon, la banaton de Ozora, Dalmacion, Bonsnion, Rascion, la banaton de Matsova, Bulgarujon, la banaton de Soeremia, la Neĝan Ebenajon, Moldavion, la landon de la kunoj, Bessarabion, Halicson, (Galicion), poste venkis la tatarojn kaj unuigis Pollandon kun Hungarujo.

Kaj samtiam, kiam en Mezeŭropo la germanaj princoj kaj aliaj germanaj feŭdalistoj per la germana orabulo (1356) denove subfosis la aŭtoritaton de la germana imperio kaj detruis mem la landon, ĉar ili heredebaj kaj eternaj faris la markgraflandojn en Germanujo, kaj

kiam la imperion ili elĵetis por la pasioj kaj kapricoj de la imperiestrelektado, la landon ja al la konstantaj bataloj (disiĝo de Svisujo, perdo de Burgundujo, la asocio de la urboj kontraŭ la kavaliroj ktp.), kaj

kiam okcidente de ili la francoj kaj la angloj suferis sub la ŝarĝoj de la milito centjara, kaj

kiam en Italujo ja riĉiĝintaj burĝoj de la urboj konkuris kun la kavaliroj kaj tiel ĉi la maron de la konfliktoj superŝutis sur la landon,

tiam la hungara reĝo: Ludoviko—per la sankciigo de la leĝo “aviticitas” (pradevena heredo—1351) tian bazon kaj fundamenton donis al la trono kaj al la popolo—al la magnatoj, al la nobelaro kaj samtempe al la burĝoj—kaj tiel ĉi je jarcentoj ankaŭ al Mezeŭropo, kio ĝis la plej lastaj tempoj—se ne ĝuste fundamento, sed tamen potenca apogilo estis de la ordo de Mezeŭropo. Tiu

organizo saĝe elpensita, atestanta veran ŝtatorganizan kapablecon, kiu per la malrapida etendiĝo de la departementa organizo de Sankta Stefano kaj per la aŭtonomio bone komentariita, ankaŭ en la socilandoj same per aŭtonomio,—tiam ankoraŭ nenie songita—(ĉar Hungarujo neniam konkeris, neniam subigis landojn, sed faris ilin socilandoj)—plifortigis la landon de la Karpatoj—la naturan, unuecan terfortikaĵon kaj ties enloĝantaron. Kaj la tuton kuntenis ĝi per la mortinta latina lingvo, per lingvo tia, kia neniun ofendis, neniam atakis la sentojn naciajn kaj rasajn de la popoloj kaj tiel tiu ĉi organizo faris la hungararon por jarcentoj gvidanto de Mezeŭropo.

Poste iom da tempo la reĝo de la lando: Sigismundo (1387–1437), ĝuste per la potenco kaj aŭtoritato de la hungara reĝeco akiris la germanan-romanian imperian seĝon.—Kvankam Pollando kaj kelkaj sudaj sociaj landoj perdiĝis, tiu ĉi reganto, per la restinta, sed tamen granda reĝa potenco kaj per la imperiestra aŭtoritato, restarigis ankaŭ la aŭtoritaton de la antaŭe plej granda kaj plej unua eŭropana morala Digno tiam tre-tre distaŭzitan.

La kristanismo nome tiam disfalis dum la investituraj bataloj (militoj inter la imperiestro kaj la Papo pro tio: kiu eknomigu la kristanajn ekleziajn dignojn) kaj dum la krucmilitoj ĝuste pro la francaj perfortaĵoj. La francoj translokgis la papon el Romo en Francujon, en Avignonon kaj nek la italoj, nek la germanoj volis akcepti la papismon starantan sub franca influo. Estiĝis tiel ĉi tri papoj. (Schismo=disfalo de la kristanaro.) La unuecon restarigis la sinodo en Constanco (1414–1418) sub protektado de Sigismundo. Oni abdikigis la tri papojn kaj elektis denove unu.

La tia ĉi ekakriĝo de la franca kaj germana prakonflikto, instigite de religiaj kaŭzoj, jam tiam antaŭenjetis la ombron de tia terura milito, kiu—kvankam en Italujo la individuon per la mondo de la humanioraĵoj (klasikaj spiritaj restaĵoj) al la ekflorigo de la renasanco (renaskiĝo de la sciencoj kaj artoj) kondukis—tiu milito dum la tempo de la protestantismo (reformacio) unu kaj duonjarlonge furiozis preskaŭ en la tuta Eŭropo. Tiun ĉi teruran danĝeron, almenaŭ la eksplodon de tiu ĉi milito, deflankigis—rekte forŝovis—Sigismundo, kvankam siajn landojn: Bohemujon—Ĉeĥujon kaj Moravujon—Silezujon kaj Supran Hungarujon lasis al la venĝo de la bohemoj (Ĉeĥoj: husitoj), kaj kvankam li jam antaŭe ne povis ekstarigi la turkan potencon, ĝis la Danubo antaŭenŝoviĝintan de sudo (venko de la turkoj ĉe Granda Nikapolo —1396)—des malpli, ĉar kun tio la granda orienta greka imperio interkonsentis.

Tiel turniĝis la atento de nia lando tute al la sudo.

Kaj kvankam ankaŭ hejme sufiĉe da malbono ekzistadis, la mondfama (333) 11

turkvenkinto: Hunyadi Joano ĝis Varnao—ĉe la Nigra Maro—kaj ĝis la Turdokampo (en Sudrascio, nun Jugoslavujo) pelis la turkan armeon per la hungara forto, sed fine li tamen nur ĉe Nándorfehérváro (nun: Belohrado) povis mortbaton doni al la turka armeo (1456). Je memoro de tiu ĉi grand-signifa venko aŭdiĝas ankaŭ nun ĉiutage tagmeze en la tuta kristana mondo la tagmeza sonorilegado.

Kaj poste, kiam la pacon de Mezeŭropo, pro la plej novaj ĉefaj voloĵ renversiĝintan, la turkoj denove minacis el sudo, la hungara reĝo kun sia tre bone fondita centra potenco reĝa ne ektimiĝis de la nova danĝero: tri, eĉ kvardirekten militis dum sia tuta vivo pro la eŭropana, kristana paco.—Tiu ĉi hungara reĝo: Mathiaso (1458-1490) militis kontraŭ la poloj, kontraŭ la ĉeĥoj, kontraŭ la germana imperiestro kaj kontraŭ la turkoj. Liaj armeoj ĝis Breslaŭ (hungare: Boroszlo), ĝis Praho kaj ĝis la Dinaraj Alpoj vagadis. Lin mem la ĉeĥoj elektis reĝo de Ĉeĥujo, liaj armeoj okupadis Moravujon, Silezujon, Lusacion, Malsupran Aŭstrujon kaj ties ĉefurbon Vienon, kaj fine Steiermarkon.

La hungara reĝlando dum la XVI.—XVII. jarcentoj.

Tiam falegis la malbono sur nin. La individuaj voloĵ, la trotaksitaj liberecoj kaj la ekflamiĝoj de la senbridecaj klopodoj: liberiĝi de la obligacioj koncernantaj la intereson de la komunumo, la malbonaj, neĝustaj interpretoj de la aŭtonomio, la malrektaj emoj, inklinoj al sendependeco, al la memstareco surŝutis sur la landon la turkan danĝeron kaj en politikaj kaj en religiaj rilatoj disŝiris, dispecigis tiun ĉi landon, unuece kreitan de la naturo kaj de la Dio, kaj belege unuece organizitan de la homa saĝeco.

Sed la hungara reĝlando malgraŭ ĉiuj danĝeroj, kaj malgraŭ la dispecigo enfermiĝis en la fortikaĵon konstruitan sur la prafundamentoj kaj ekstaris la sturmo. La hungara reĝo de ĉi tiu tempo, samtempe estis en unu persono, kiu (preskaŭ ĝis la plej novaj tempoj: ĝis 1804) estis la germana-romana imperiestro. Ili kiel regantoj, kiel imperiestroj en Germanujo ne povis reĝi tutrajte pro la germanaj partikularaj klopodoj kaj tial nature plimultigis—se povis—nur siajn familiarajn provincojn. (De tiu tempo la proverbo: Bella gerant alii, tu felix Austria nube!—Militu nur aliuloj, vi—feliĉa Aŭstrujo—nur edziĝu!) Sed kvankam la imperio de tempo al tempo estis nur titolo, la posedo de la kronregnoj apud la morala signifo de la hungara reĝeco tian

forton donis al la regado, ke sian pozicion inter la plej grandaj konfuzoj ektenis, eĉ tre forta estis ĝi reakiri sian malnovan aŭtoritaton.

En tiu ĉi tempo atakis duafoje la franca megalomanio tiun ĉi mezeŭropan potencon imperion de Karolo, la V. (1519—1556), poste sub liaj filoj dividitan; la franca potenco federaciis tiutempe kun la internaj germanaj konfuzoj kaj kun la eksteraj turkaj klopodoj. Pro la germanaj protestantismaj klopodoj—bedaŭrinde—al la federacio aliĝis ankaŭ la papo. La franca potenco atakis per fortoj bone organizitaj: per la ĝenerala burĝa, do al la forto de la tuta franca popolo, al la plej nova gvidanta klaso apoganta, batalanta pro novaj celoj—kaj per la eksteraj, samtiel novajn celojn akiri volantaj fortoj.

Kaj dum en Germanujo per la religia libereco ĝi kontraŭagitis la subulojn (politiko!) kontraŭ siaj regantaj, tiam hejme la nokton de Sankta Bartolomeo aranĝis (masakro de protestantoj—1572) kaj tiel sukcesis atingi, ke la tiama malfiksa unueco de Germanujo post la tridekjarlonga milito (1618—1648) disfalis (estiĝis pli ol tricent malgrandaj princlandoj!)—kaj ŝajne la imperio perdiĝis. Sed, kvankam tiu ĉi de longe malforta potenco multe da aŭtoritato perdis, tamen, kiam la paco al direkto de okcidento certigita estis unuaparte, alia parte en oriento la de tago al tago malfortiĝinta turka potenco ebligis al la germana imperiestro kaj en unu persono al la hungara reĝo, ke Hungarujon liberigu de la turka subpremo, eĉ ke en sia persono al la Hungara Sankta Korono alligu denove la princlandon: Transsylvanion (Erdély), per tiu ĉi plifortiĝo de la hungara reĝa potenco kaj per la posedado de la kronregnoj—tiam mezeŭropan potencon kunforĝis, kio de la linio de urboj: Metz kaj Toul—ĝis Moldavujo kaj ĝis la Neĝan Ebenajon kaj tra Kroatujo ja ĝis la Adria Maro etendiĝis. La Hungara reĝlando ja—bedaŭrinde—en la plej krizaj tempoj nur el dekunu departementoj (distriktoj—comitatus) staris anstataŭ la malnovaj 72! Norde nome tiam deŝiriĝis de la malnova Hungarujo: la princlando de Thököli, meze estis la teritorioj okupitaj de la turkoj, oriente estis aparte 7 departementoj kaj la Partium, kaj aparte staris Transsylvanio. Belega konsekvenco de la libera reĝelektado kaj de la turka frateco-homagian mankison postulinta!—La menciitaj 11 departementoj nekliniĝante subtenis la suverencon kaj la prarajton laŭkontraktan—suferante, sed senkompromise, ĵaluze defendis ĉiun plandolarĝan terpeceton de la Sankta Korono de Sankta Stefano. Do samtempe ankaŭ por Transsylvanio, kaj pro la paco de la momento ne donis, ne transdonis sian prapatran heredaĵon pro lento da telero de Esaŭo! *Daŭrigota*



惜しい露木さん

6月15日 露木さんは永い病床生活にも自分の33年の生涯にも別れて永眠せられた。17日遺骨を拾いに行つて今更ながら露木さんの生前のことが思い出されて來た。私が始めてエスペラントの指導を受けた師であり又之れを機縁に10年間交誼を忝うした畏友でもあつた。我がエスペラント界有数の篤學の士であつて日本臣民としての強い信念の下にエスペラントを以て世界に眞の日本の姿を知らしめようと身を以て努力し盡して來た人である。今日我が國が未曾有の國難に直面して國を擧げて盡忠報國の誠を致そうとゆう時に少くとももう2-3年は生きていてもらいたい人であつた。

露木さんが日本のエスペランティストとしてなそうと考へていたことは既に“Revue Orienta”でも又晩年自分で創めた Societo de Orienta Kulturo の機關誌でもその一部が具現せられている。健康にも財力にも恵まれずかなり無理をやつていられたようだ。唯精神力一つで働き抜いたかたちがある。“Orienta Kulturo”の第6巻*

Mortis S-ro K. Cujuki

ekskomitatano de JEI
la redaktoro kaj administranto de
“Orienta Kulturo”

— + —

Forpasis sen bruo

Tre pezas sur mi ĉe la koro,
ke mi nekrologu pri samidean’.
Nun kun la plej peza el pezaj doloro
plenumas la devon tremante la man’.

Tre kara kolego Cujuki
hodiaŭ sin trovas ne inter ni plu:
por nin al profunda funebro konduki
li pasis el rondo nia for sen bru’.

Li mortis je l’ sesa vespere,
la tagon dekkvinan de l’ ĵusa juni’.
Pasigis li tridek du jarojn surtere,
kulturis senlace li kun energi’.

Li amis ĉiam diligenti,
ne ŝatis bruegi sen far’, sen sincer’.
Mortonte do li ne bezonis pripenti,
ĉar ĉion oferis li al la afer’.

Deziris min vidi en krizo
li, kiu jam kuŝis en ŝtona dormstat’,
kiam mi alkuris al li en surpriz’.
Sukcesis mi veki lin el la komat’.

Per voĉo sensona li petas,
dirante al mi, “Jam vizitos min mort’.
Verkaron de mi postlasitan mi metas
al via dispono; ĝi estu en ord’.”

Ĉu multon paroli malĝoja
mi povus? Mi simple respondas per “Jes!”
Sur pala vizaĝo aperas refoja
koloro viveca pro mia promes’.

Al mi sur la dekstra manplato
ankoraŭ nun restas tre freŝe varmet’
de l’ lasta manpremo kun la bedaŭrato
mortonta, tenanta sin tamen en kviet’.

Pereis la korpo al li jam,
sed vivos l' espero ĝis eĉ post jarmil'
kun nia afero floranta por ĉiam.
Ripozu, animo lia, en trankvil'.

Mijake-Sihej

露木清彦君を偲ぶ

6月19日夕露木清彦君の訃報を手にして暫く茫然。遙か東の空に向つて黙禱をささげる。

過去20年のエスペランティスト生活の中で有能にしてしかも春秋に富む同志の死にあつた程淋しいものはなかつた。知己友人がなくなつた時、肉親をなくした時の悲しみもさることながら共に苦しみ共に努力した同志、しかもその前途に偉大な仕事を囑望していた場合その死は何ものにもかえがたく、我々の心にうける傷手は肉親の死よりも一層悲痛である。長く手を携えて働いた同志露木清彦君の死はまさにそれである。本當に文字通り血の涙が流れ出る思いを禁じ得ない。

編輯部の求めによつて故人の思い出を述べて些かなりとも故人の靈をなぐさめたいと思ひ筆をとる。自分は今エスペランティストとして孤獨に近い生活をおくつてゐる。特に露木君の死を語り悲しみを分かちあう samideano の一人もいないのをなげくと共に、心の悲しみを筆に托し全國の同志と此の悲しみを分つより外に術のない境涯を想像していたゞきたい。

自分が露木君と知合つたのは昭和4年頭新小川町の學會時代であつたように思う。(新小川町といつても小坂さんのお家だつた横町の路地でなく表通りに出たところである。)

昭和4年頃大橋介二郎君等が中心に會話會たる Argenta Kunsido が銀座で呱呱の聲をあげた。露木君は間もなくその

*(13年3月發行)に載せられた近衛首相の時局に處する國民の覺悟のエス譯の如き、あれを見る時當時の苦闘には全く驚くべきものがあつたことを思出すのである。今にして思えばあの時の無理が今度の死の遠い原因ともなつたのではなからうか。續いて8月出された第7巻の如きは實に露木さんが病床で萬事やつて退けた頑張り方であつた。

早死する人は何んでもやつておこうと急ぐためか、仕事の上では中々一寸の隙もなかつたようだ。その點私は閉口もしたが又敬服もしていた。

とまれ現下のエス界否日本の情態から考えて斯んな人を喪つたことは返えす返えすも残念であり、又露木さん自身としても心残りのことであつたろうと思われる。

上田嘉三郎

會の常連となられた。そしてその後ズット AK の常連であり幹部であつた。併し明朗な大橋君が argento の雄辯で AK の AK たる特色を發揮されたに對して、露木君はどちらかといへば常に oro の沈黙を以て AK における特異な存在となつてゐた。露木君はその性格からして會の座を白らけさせないために心にもない饒舌を弄ぶとゆうことをしない人であつた。kunsido の隅で人の喋るのを聞きはれてゐるとゆう風であつた。しかし話題が露木君の専門の問題になると、その蘊蓄を傾けて話されるとゆう風であつた。

露木君にはどこかに俳聖芭蕉のような淋しみがやどつてゐた。世の中をあきらめたような年配よりもふけて見えるところがあつた。これは同君の御境遇がそうさせたのではないかとゆう氣がする。同君の御祖父さんとかは銅像製作をやられ相當の資産をもたれた大家(?)であつたとの事、その後お父さんとかの代に時

代の波のため事業が香ばしくなくなり家運も幾分左前になられたとゆう風なお話を同君から直接聞いたのであつた。先祖の立派なお墓が小田急の沿線のどことかにあるとかきいた。

昭和4年頃 Revuo Orienta 誌上で活躍されていた同志の一人に松本清彦君があつた(今の馬場君)。昭和5年のROの表紙には毎月木版の繪が入れたがこれは露木君が作られたものである。露木君をしらない地方の同志は同じ清彦君なので、露木清彦とゆうのは松本君の雅號だろうと誤解していたそうである。苗字が一寸雅號を思わせるようなやさしいものだからだろう。木版圖案はその後昭和7年のRO誌の毎月の表紙にも入れられた。同君は彫刻家たるお父さんお祖父さんの遺傳をうけられ小供の頃からいろいろ彫刻をされたようである。ザメンホフの reliefo をもつくられて學會に寄贈され又ザメンホフ祭の時にそれをかざつたこともある。自分が京城へ來ることになった時記念にと農家と木とを彫りこんだ銅の筆入を下さつた。これは今も私の机上にのつている。

露木君がRO誌に筆をとられたのは昭和9年(1931)1月號からだと思う。同君はその年から學會評議員になられた。そしてずっとそれから今迄評議員だつたと思う。同君は評議員として學會につくされた功績も甚だ大きい。昭和6年ROの内地報道は専ら同君が編輯されたのであつた。その後もROの編輯の手傳をされたことは少くない。學會評議員でも忙しい人は始終學會へ來られることはないが、露木君は比較的自由な時間の多い生活をされていたので、學會へはよく來られた。RO誌の發送の手傳は昭和11年頃迄來て下さつた。水曜日の例會も休まれることが少かつた。上述の如く Argenta Kunsido にも出られたし、その

外 TEK の會合にも常に出られこれの幹部にもなられたかと思う。

RO 誌上にはその後考古學、人類學關係のエス文を發表された。昭和7年から8年にかけては Japana Mitologio (日本神話學) を書かれた。同君はこの方面にも造詣深く一家言をもつておられた。そして昭和9年頃からはこの Mitologio の力作の完成に努められると共にその方面の書物を研究されていた。筆者所持の古事記の英譯 (Chamberlain) もお貸ししたこともあつた。

昭和10年夏更に東洋文化研究に關心をもつエスペランチストを糾合して東洋文史研究所を主宰され Orienta Kulturo 誌を出されたことは誰も御存じの筈である。

同君は山本有三氏のラヂオ・ドラマ「霧の中」をエス譯されたこともあつたが、同君の本領はどこまでも神話學、考古學、人類學方面にあつた。

同君について敬服するところとはとにかくエス語の實用化とゆうことに邁進されたことであつた。エスペランチストが學會以外にいろいろ團體をつくる時はよく學會の眞似のようなものをつくり學會の雑誌のようなものを出す人がある。自分のエス生活20年間に随分こういつたことに出あつた。これは中心機關の力を弱めることになる。しかし學會とちがつた方向にその別働隊としてエス語活用方面につとめるとゆうことは各方面でやつてもらいたいことだ。露木君は文史研究所を以てその方面に努力されたものといつてよい。學會の基礎が貧弱で十分この事業をお助けできなかつたことはお氣の毒であつた。

露木君はあの大きな事業の途中でたおれられた。同君が畢生の努力をこめられた“Japana Mitologio”の原稿も上梓を見ずに我々同志の手に残された。同君は去る15日亡くなられる3時間前最期の

近づいたのを自覚され學會の三宅主事に面會を求め半分意識不明の中で原稿整理をたのむといいのこされたとのことである。自分は同君の遺稿が一日も早く上梓されることをまちのぞむものである。

岡 本 好 次



露木さんの思い出

6月15日は暑い日だった。露木さん危篤の報に、その日三宅さんと病院へ駆けつけたが、それが私の最初で最後のお見舞であつた。病氣におなりになつてから2年にもなるとゆう。その間私は自分の多忙のためにお見舞にも伺わず、またそれ程お悪いとも思わず、心にかゝりながらも毎日せかせかと仕事に追われてすごして來た。併し、その2年間は露木さんにとつてどんなに長く又辛かつたことだろう。露木さんは長い戦いに疲れ切つて想像も出来ない程變り果てた姿で病床に横たわつていらした。私達のお見舞をととても喜んで下さつて色々とお話なさりたい様子だったが、絶間なく昏睡が襲うらしく、後では殆んどお話が通じなくなつた。一時間半程して、『また伺いますから』と私達が立上つた時の露木さんのお顔を何といつたらいゝだろう。あんなに切ない悲しみに満ちた顔を私は今まで見たことがない。『もう絶対にあえない、今日が最後だ』とおつしやつて、それがあまりに名残り惜しそうなので私たちは立去りかねた程だった。露木さんが亡くなつたのは、それから3時間後であつた。

露木さんとお知合いになつたのは何時、何處で何うしてであつたか少しも記憶に残っていない。多分當時池袋のお宅で開かれていた Serpento 會に鐵道の青

木さんや矢島さんにつれられて出席した時、はじめてお目にかゝつたのではないかと思う。古い Revuo を繰つてみるとそれは 1931 年の4月のことである。當時私はエスペラント1年生であつた。毎週金曜日に集つた Serpento-trupo では『父歸る』『霧の中』『ドモ又の死』等の脚本を読み、水曜日の Serpento-Rondeto では fraŭlino だけで Karlo を教えていた。他の fraŭlino 達は次々と落伍して、結局私一人になり、後では一人だけで作文を教えていた。又その頃露木さんがなさつていた花言葉や日本神話のお仕事を手傳つたりしたことを覚えている。日本神話のお仕事と關聯して私にも古事記物語を譯するようにと色々面倒を見て下さつたが力及ばず遂に物にならなかつた。銀座の會話會 Argenta Kunsido へ出席することを奨めて下さつたのも露木さんではなかつたかと思う。考えてみれば 1931 年は私が小さく閉じこもつていた鐵道エス會の中から出て廣い日本のエスペラント界の風にあたつた年で、露木さんはそうゆう私のために蔭になり日向になりして何時も變らず指導し援助して下さい。いはゞ私の中學期の恩師である。恥かしがりやで我が儘で、仲々言うことをきかない骨の折れる生徒であつた私を、何時も熱心に指導して下さい。露木さんの忍耐強さと御親切に今更何と感謝してよいかわからない。露木さんはその亡くなる日に、『やりたいことが澤山あつたが出来なかつた。あなた方はしつかりやつて下さい』とおつしやつたが、ほんとに長く生きて、うんと働かねばならないと思う。そして日本の婦人エスペランティストとして何等かの意義ある存在になることが露木さんの長い御厚意にこたえる道であらう。

萬 澤 ま き

日本エスペラント史の一挿話

ガントレット恒子女史と語る

数年前の或日、學校で英語を教えて頂いていたガントレット恒子先生と御一緒にお食事をしたことがあつた。その時、敬愛する *nia profesorino* の *edzo*, *S-ro Edward Gauntlett* こそ、日本エスペラント運動の黎明期に於て、忘るべからざる *semanto* であつたとうことを伺つて、心ひそかな驚きに似たものを感じた。それは恰度私がエスペラントを學び始めて間もない頃のことであつた。

『先生もエスペラントをおやりになりましたか?』

『えゝ、ガントレットがとても熱心で、私もやらされましたよ。きつと私が、最初の生徒だつたでしょう。日露戦争のすぐ後のことですから、ずい分昔の話ですけれど。』

そして、ほゝえみながら、

“*Tamen mi forgesis ĉion.*”

『かれこれ40年ばかり前になるのでしょうかね。私共は岡山にいたんですが……』と、その頃を思い起しながら、語つて下さつた。

ある日、何氣なく英語の雑誌の頁を繰つていた *S-ro Gauntlett* の目にとまつたもの——それは國際語, *Esperanto* の *lernolibro* の廣告であつた。語學に興味を持つ *Sinjoro* は、早速この本で獨習をはじめ、3週間程で習得してしまわれた。『これは素晴らしい! 外國語の學習に悩まされている日本の學生達に先ずエスペラントを教えて外國語學習の踏臺にするようにしたら非常に負擔が軽くなる。』とてたゞちに普及、宣傳を思立たれたのであ

とおつしやつたのが、今でも昨日のことのやうに鮮かに私の記憶に残つている。

婦人運動の先驅者として、今日まで常に女性のよき指導者として第一線に立つて活躍してられる先生、また私にとつて、實際にこの上もなくよき師であつた先生が、私達の生れる遙か以前に既にエスペラントを學ばれたとうことは、大きな喜びと心強さを與えてくれた。そして當時のお話を、何時の日にかあらためて、もう少し詳しく先生から伺つてみたいと思いつき、そのまゝになつていた。

ところが、つい先頃、幸いにもこの願を實現させることが出來た。私は淀橋の婦人矯風會本部に、或る朝先生を御訪ねしたのである。

磯 部 幸 子

る。騰寫版刷の粗末な *teksto* で通信教授を始めたところ、申込者の數が相當にあつた。*Teksto* を原紙へ書いて、印刷し、發送するまで、すべて *S-ro Gauntlett* 一人の仕事であつた。(この通信教授はたしか1906年に始められたもので、これが日本に於て *aktiva* な *Esperanto-movado* の第一歩として特筆すべきものであることは今更言う必要もないことと思う。) その *kursanoj* の中に、村本さんとゆう非常に熱心な人があつた。印刷屋の若主人で、この人が *S-ro Gauntlett* の許へ、直接エスペラントを教えてほしいと頼んで來た。

『主人は大變喜んで、早速授業を始めよ

うとゆうことになつて、一人では淋しすぎるから私達と一緒に習えとしきりにすすめました。あまりやりたくなかつたんですが、いわば村本さんのおつき合いに、ひきこまれたんですね。その時誘はれて習い始めた人達とゆうのが、私の弟の山田耕筈、古橋隆太郎さん（その頃五高の學生で、現在は東京に居られる由）、それから上代淑子さんといつて、今、山陽高等女學校の校長先生をしている人と私などでした。何しろ村本さんの熱心さに引張られて、私達も *elementa kurso* だけは、とにかくすませました。一時エスペラント熱が家中を風靡して、お食事の時など一切エスペラントで話さなければいけないとゆう嚴則をこしらえた程です。けれど、私達はもともと不精無精やらされた組なので、何とか口實を設けてやめてしまつたのですが、村本さんはたつた1人最後まで頑張りとうしましたよ。』

それから間もなくの夏休みに、S-ro Gauntlett が、在留外人の間にエスペラントを普及させたいとて、そのために特別の講演會を開き、御自身エスペラントで演説を試みられたことがあつた。その時 S-ino Gauntlett や、山田耕筈氏をはじめ、かつての *kunlernantoj* が、餘興に“*Espero*”その他エスペラントの歌を二つ三つ歌われたのである。今日、作曲家として並びなき名聲を博している山田氏が *Himno de Esperanto* を壇上に立つて歌われた姿を想像する時、誠に感慨深いものがある。

先生はちよつと一息ついて、更に興味深い *epizodo* をきかせて下さつた。

『前にも申上げたように、あんまりエスペラントに對して熱心ではなかつたので

すが、婦人の國際會議で公用語にエスペラントを採用するようにと、提案したのは、おそらく私がはじめてでしょう。』

1920年の7月、歐洲大戰の直後ジュネーヴで、國際婦人會議 (*Internacia Virina Kongreso*) が開かれ、主として婦人參政權問題について討議されたことがあつた。その時ガントレット先生は、日本の代表として出席された。16ヶ國から代表が送られて、會議の公用語は英語、ドイツ語、フランス語であつた。ある人の演説が英語で行われれば、たゞちに獨、佛語に通譯され、ドイツ語であれば、英、佛語にとゆう風に、その煩しさは一通りではなかつた。しかも東洋諸國の代表者の中には、これらの外國語を使いこなせない人も多く、自分の意見を充分に發表出来ないような状態であつたので、先生は、こんな時にこそエスペラントのような國際語を使用すべきだと痛感された。

その會議の席上、S-ino Gauntlett に *nomkarto* をさし出した一紳士があつた。“D-ro Edmond Privat, *Geneva Universitato*” *Geneva Universitato*? これはエスペラントではないか!

“Tio estas Esperanto, ĉu ne?”

その紳士は驚きの眼で、この東洋の女性を見つめて、問返えした。

“Ĉu vi parolas Esperanton?”

かくて、“*Vivo de Zamenhof*”, “*Historio de Lingvo Internacia*”を始め多くの名著によつて我々に親しまれている D-ro Privat は、この會議にエスペラントを公用語に採用する様に提案してはどうかと、S-ino Gauntlett に勧めた。先生が滿腔の賛意を表せられたことは言うま

でもない。翌日の會議に、ガントレット先生は立つて叫ばれた。

『國際會議なるものに於ては、各國人が皆平等に意見を述べるべきであると思います。ところが、本會議の公用語は、英、獨、佛語でありまして、特に我々東洋人にとつて不公平であり、言語の點で局外者の如き感じを受け、感情上にも甚だ面白くないと思います。三年後に開かれる豫定の次の會議には、國際語エスペラントを使用することをここに提案する次第です。エスペラントは容易な言語であり、各國人が簡単に習得し得るのであります。更にエスペラントを公用語として採用することは、この國際會議に一層深い意義を與えることが出来るでありましょう……。』

直ちに、D-ro Privat の賛成演説が、次に行われたことは勿論である。

これが俄然問題となり、その日は3時間あまりエスペラント採用の可否について議論が続けられたが、結局熱心さの足りない歐米人達が多数であつたため、否決されてしまつた。今更、餘計な新しい言葉を一つ學ぶのは面倒だとゆう理由のもとに。

先生は再び立つて言われた。

『否決するのに堂々とした理由があるのなら、首肯しますけれど、「面倒だ」とゆうことは理由にならないではありませんか。それなら、参政權運動でも同様に「面倒だ」と言つて片付けてしまえるでしょう。世の中を進歩させようと努力する人々の集合に於て、エスペラントが斯くの如く簡単な理由で否決されたことを、私は非常に残念に思います。』

その後幾度か、この會議にエスペラン

トの事が問題にされながら、ついに今日まで可決されないでいる。これは、熱心に支持してくれる代表者が少いこと、此の種の國際會議に出席する人々には年長の婦人が多いので、進歩的な傾向が稀薄なためであろう。『こんな風ですから、今後大いに若い人々が國際會議などに出席して、新しい試みをよいと思つたら、どんどん實行して頂きたいと思います。その點あなた方に大きな期待をかけています。私共のように年上の人間は、そうゆう若い人達目でみて來たもの、感じて來たもの、また實行したいと思うものを素直な氣持できいてあげて、一緒に事を運んで行くべきだと考えます。どんなことでも、そうして行かなければ大きな進歩は望めないでしょう。……』

エスペラントの問題に出發して、汎太平洋會議や、矯風會の國際大會等のお話をいろいろきかせて頂き、おいとまするのが、本當に心惜しい氣がした。が、あまり長くお忙しい先生のお邪魔をしてはと思い、時計をみたら 11 時を廻つていた。びつくりして、お別れの言葉をのこして、戸外に出れば、街路樹の瑞々しい青葉が太陽に照り映えて、初夏の爽かさが邊一面にみちあふれていた。

Miyatake-Sei o

Japana Gramatiko

por

Esperantistoj

クロス装 137 頁・携帯型・1 圓・送料 3 錢

取次・財團法人日本エスペラント學會

東京市本郷區元町・振替東京 11325

八絃の基柱建設に協力

宮崎大會を記念して

われらの來年度大會が、皇紀2600年を慶賀する意味で、祖國日向の宮崎市で開かれることになったことはすでに報道したとうりであるが、この意義深い大會に際して、この曠古の盛典にふさわしい記念事業をエスペランティストの手によつてとげたいと、大會招待の地元宮崎の會員はもとより、九州聯盟の會員たちもよりより協議中であるが、まず第1に、宮崎高農日野教授の、世界各國から石塊を集め、それを積んで八絃の基柱建設に協力することとしたいとゆう案が研究されつつある。

大會協賛會を作れ

熊本エス會の提案

日本エスペランティストの祖國愛の表徴たる來年度大會を盛大ならしめよとの聲は、全國特に九州の會員のあいだに高くあげられているが、熊本エスペラント會では、會長神尾碧堂氏の名によつて、各方面へ檄を飛ばし、こ

の大會をして、眞に日本のエスペランティスト全體のものとし、歴史的な國民的盛事を奉祝するようにするため、全國會員により大會協賛會を作り、精神的にも物質的にも絶大の援助を與えることにしたいとの提案をしている。

これは、すでに大阪大會において、宮崎への招待が可決された瞬間から會場を支配していた空氣と相通ずるものがあるから、全國のエスペランティストの大きな支持を得るであろうことは明かである。

大會日程も今月中には、大體決定され本誌來月號あたりに發表される模様であるから、そうなれば、この協賛會の計劃も本格的にとりあげられることとなるであろう。

大會日程に關し

全國の會員へお願い

第28回日本エスペラント大會 準備委員會

宮崎市南廣島通り III 杉田醫院内

祖國日向に開く明年度大會を何時頃開けば最もよいか、7月25日までに當地着を期して、皆様の御都合と御意見とをお聞かせ下さいませ。

準備委員會は4月29日、天長の佳節を中心に3日間と考えていましたが、當日は學校官廳方面の方に、差支えるらしいので、あらためて皆様の御意見をうかがいそれに従いたいと思います。

つぎは「熊本案内」

9月ころ出來

九州の觀光都市熊本についての紹介記事が IEL の機關誌 “Esperanto Internacia” 5月號に出て、その反響がつきつぎにあるのを見て、エスペラントに對する認識を深めた熊本市當局では、エスペラント版案内を出すことに決定、市學務課の市原耿路氏にその編輯を命じた。およそ9月ころには、日本で第3番目のエスペラント版都市觀光案内が出るわけである。

新 獨 習 書 2 種

白水社と太陽堂とから

エスペラントが新東亞建設途上の日本で再認識されつつある機運に乗じ、最近一般書店から新しい獨習書があいついで2種出た。

一は、6月30日太陽堂から出された石黒修氏「自習者のエスペラント」(1圓70錢、送料10錢)、他は、7月4日、白水社から「第一步」セリオの一冊として出された「エスペラント第一步」(1圓50錢、送料9錢)である。

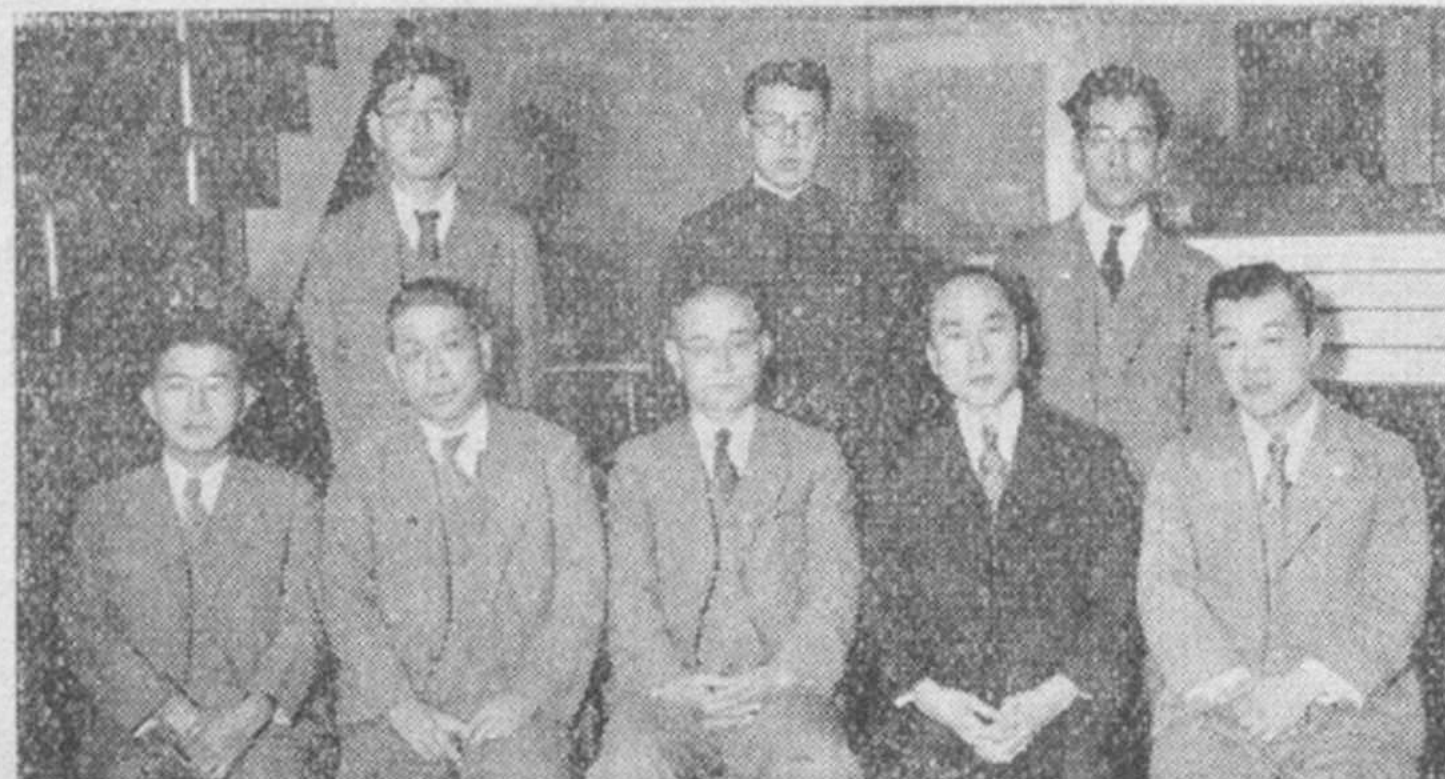
前者は、すでに二十數種の獨習書を書いている著者の熟練した手になるものであり、後者は「エスペラント案内」に新機軸を出した著者のとつておきの企劃になるもので、これには、別に、teksto だけを集めた講習會用の「エスペラント第一步讀本」(40錢、送料3錢)がある。(いずれも學會で取次ぎ。)

國際科學單位會議へ提案

オランダ発行の雑誌“Erkenntnis”4月15日號によれば、昨年イギリスのケンブリッジで開かれた第4回國際科學單位會議では、エレシエー、マヌーリ兩氏が、1. 次會大會の諸公告はエスペラントでなさるべきこと、2. エスペラントが會議用語として認められたいことの2ヶ條の提案をしたとのことであるが、その結果は明かでない。(山本修氏報)

エス文入エハガキ

かねてエス文説明入エハガキ「富士百景」を出している神奈川縣藤澤町鶴沼書店では、最近またあたらしくエス文入エハガキ「鶴沼と片瀬風景畫集」、「鶴沼と江之島」各8枚組を出した。



〔公告〕

普通學力檢定試験施行

9 月・札幌

下記のとうり普通試験を行います。

昭和14年7月12日

試験委員會

期日 昭和14年9月24日午後1時

場所 札幌市丸井百貨店別室

申込 9月10日までに、學會あてに、住所氏名(ローマ字綴つき) 明記、受験料1圓をそえて、なされたい。

發表 合格、不合格は受験者へ通知し、合格者氏名は學會機關誌で發表する。

高等學力檢定合格者

下記の諸氏は、學力檢定規約により、高等學力をもつものと認め、これに高等學力認定證をあげることに致しました。

昭和14年7月1日

財團法人日本エスペラント學會

理事長 大石和三郎

【4月施行の學力檢定試験によるもの】 31. 淺野孝(名古屋), 35. 村上廣一(大阪), 36. 野原信子(大阪), 37. 松原雪江(大阪), 38. 小泉昇(大阪), 39. 三石清(東京), 40. 柏原ひで子(東京), 41. 笹原茂三郎(東京), 42. 松田勝彦(大阪), 43. 轟光春(神戸), 44. 伊藤幸一(大阪)(以上受験番號順)

【附則第1項によるもの】 45. 淵田多穗理(蒙疆張家口・華北交通社員), 46. 根本潔(東京鐵道省技手), 47. 鈴木清(平塚), 48. 山根茂(東京・理研所員), 49. 高木貞一(奉天・會社員)

猪川城氏送別會〔仙臺〕

6月1日東一番丁明治製菓で(R.O. 7月號 43p. 参照)

前列左から：大友信太郎氏、松隈健彦博士、猪川城氏、菊澤季生氏、菅原慶一氏。

後列左から：大泉八郎氏、松野太一氏、山本耕一氏。

各地報道

原稿は 20 字詰に！
締切は毎月 1 日着便

東京

さきに本誌上にも発表された如く現代樂壇のホープ、ワインガルトナー氏にその才を認められたエスペランティストである新進青年作曲家小島和夫氏の肝入りで誕生した此の合唱團は、Esp-isto の集いではないが、二、三同志の顔も見えて懐しい。ロンドハルモニニアのそれとは異り、音樂のコメンツァントばかりで、イロハから歌い乍ら學ぶ方針である。同好の士よ來れ。(杉並區高圓寺五ノ八三 スキートハウス内小島和夫氏方)

久保氏歸朝歡迎會

兒童の繪畫交換による國際親善の旅を了えて歸朝された久保貞次郎氏の勞をねぎらうため歡迎會を催します。御出席ください。

7 月 14 日(金)午後 6 時から神田美土代町 YMCA 地下食堂で。會費 60 錢。

この廣告で御出席の方は、まえもつて學會の電話(小石川 5415)でお知らせください。

主催 東京エスペラント俱樂部

東海・近畿

〔大阪エス會〕 毎火曜午後 6 時半より信濃橋日清生命館 6 階ワセダクラブに於て例會を開き川崎直一氏の“Lingvo Stilo Formo”による文法講義，“Zamenhofa Legolibro”による輪讀研究，“Viva Gazeto”の披露などが行われている。6 月中の參會者延人員 65 名、毎回平均は 16 名。6 月 13 日の例會では OES 合唱隊の特別公演(?)と稀らしい Esp. 歌を吹込んだレコードで出席者を楽しませてくれた。

★歌の練習 毎金曜午後 7 時から本町一丁

目日本染料會館で Esp. 唱歌の練習會を開いている。OES 會員は誰でも參加自由。

★遠足會豫告 7 月 16 日(第 3 日曜) 明神山へ pikniko. 午前 9 時半省線天王寺驛集合。關西本線王子驛より柏原驛へ行程約 12 キロ、汽車賃 片道 48 錢。

★新入會員募集 大阪エス會は大阪地方に於ける唯一の運動團體として種々活動を續けており我國における地方會中最も aktiva な存在を認められてはいるが尙一層その活動を活潑にするためにはもつと多くの會員が必要である。大阪地方の學會會員で未だ本會に入られない方は、この際半ば義務的に本會へ御入會下さるよう切望する。會費年額 1 圓 20 錢。入會申込は北區東梅田町 28 大阪エス會(振替大阪 84930 番)へ。

〔名古屋エス會〕 Semajna Kunsido は例によつて順調に續けられています。新しい Samideano の顔ぶれが一回毎に見られ小坂先生宅の Salono はいよいよせまきばかり。昨年秋から講義を開始していた“Revizoro”はすでに teksto の半ばまで進行し事件はいよいよ面白くなつてきました。只今 Akto tria を讀み終つたばかりです。Gogol の機智辛辣な皮肉、それをたくみな日本語にうつして下さる先生の御講義の面白さに夏の夜の更けるも忘れる程です。

講義が終つてからいつも Kantado の練習をする事になつています。小坂先生の御指導によつて最近では Al la Esperantistaro がうまく歌えるようになりました。勉強を終つたあとのあのゆつたりした氣持で歌うこの三十分は何にもまして楽しい一ときです。

(S. Isobe)

四 國

〔高松〕 5 月 6 日夜 8 時高松市の古き同志平良文太郎、宮崎英一兩氏は修學旅行にて驛前住友旅館投宿中の高知市の辻重倫氏を訪問、市中散歩、ライオン食堂にて 11 時まで drinkante interparolis en kaj pri Esp.

7 日午後 3.30 多度津の古き同志中村靜雄氏はわざわざ善通寺驛へ行き、歸高途次の辻重倫氏と 5 分間快談した。

〔高知〕 6 月 17 日午前中、辻重倫氏は

(345)

古き同志藤田龜三氏を訪問、大阪大會の有様をきき、四國大會について協議をなす。

九州

〔學會福岡支部〕 月例会。6月9日午後7時より九大惠愛團食堂に於て新講習會員の歓迎を兼ね支部例会を開催す。參會者9名。曾て小倉エス會の指導者として活躍された田中國雄氏、大阪に於る普通試験に當地より受験合格された中江嬢等新舊會員の顔も交え種々歡談の後、今後例会の行事として會員の *per-aŭ pri-esperanta parolado* を催すこととし、午後10時散會す。

豫告。7月例会。7月15日午後7時より九大惠愛團食堂にて。

〔學會宮崎支部〕 6月6日：明年は當日向に各種大會が錯綜することを豫想し、對外的に *Esp.* 大會を可及的速かに宣傳する要を感じ、宣傳物の印刷を附議、大會期日を略次の如く決定した。

4月28日(日曜) 前夜大會 ◇4月29日(月曜、天長節) 大會發會式、大會協議會、高等試験、各種分科會 ◇4月30日(火曜) 觀光 1. 青島——鶴戸班。2. 西都ヶ原——美々津——高千穂班。3. 霧島登山班。

6月20日：上記宣傳物の發送を爲す。

6月26日：杉田、巢山兩氏は根井宮崎市長を市役所に訪問、市より大會への補助と市長の大會顧問就任方を懇請せる處二件共快く承諾された。

6月27日：全準備委員會合の上大會豫算編成を爲す。或いは祖國日向が贈る豪華な大會なるやも計られず御期待を乞う。

北海道

〔北海道エス聯盟〕 出征轉任等移動あつて *membroj* に變化を來したが三崎豐市氏も札幌に歸えられたり新たに來札された同志があつたりしていさゝか活氣を呈して居る。

6月14日札幌グループの永見君本部來訪 *Ekspozicio* について色々相談した。近く永見君の努力によつて札幌内に小展覽會開催される。同志諸君より材料をあつめる事にする。

6月17日相澤委員は大會準備のため會場調査や同志訪問等をした。鐵道の有名な阿部嬢と一諸に會場を二三調査する。

6月18日突然朝鮮在住の元札幌エス會員藤本五郎氏本部に來訪される。

6月18日藤本君の歓迎會を明菜に開く。

6月20日日本道エス運動の元老岡垣千一郎君來札され明治製果にて藤本君も來り座談會開催しばらくぶりにて三崎氏も出席され大いに大會に對する希望をのべられる。

6月22日札幌エス展のため材料を高瀬先生の御宅で整理し之を永見君に渡す。

6月25日相澤委員指導の下に札幌エス展の準備完成した。26日より開催する。

(HEL 本部報)

〔札幌商業學校エスグループ〕 永見正夫君の指導する札幌グループの會員は少數だがもう宣傳戦を始めようとゆう物すごい元氣である。HEL 後援の下に懸案のエス展を開催しようとするのだ。

6月14日 HEL 本部を永見君が訪問し、22日までに材料を集めるように手配し、

6月25日の日曜を永見君始め熱心な二三の學生が朝から學校につめかけたきりでポスターを書くやら説明を付けるやら材料を *aranĝi* するやら目の廻る様ないそがしさである。夕方相澤委員が立寄られ色々飾付けや説明文などに注意される。

6月26日から29日迄4日間開催する事になつた。第1日は大先輩山本佐三先生から激勵の手紙が來たりして學生諸君を感激させ入場者は約三百人であつた。締切までに正確な材料が入手出来ないのにくわしい事は次回に報告する。

大陸

〔新京エス會〕 毎週例会日を毎水曜日午後7時からに変更した。場所は從來通り、祝町2-14 荒川氏宅で。

別に初等者の爲に毎金曜日午後7時から同所で會合を始めた。テキストは『エスペラント講座』。

住吉氏宅の中等講習も進行中、テキストは『童話讀本』。

山縣光枝嬢來住。一段となごやかさと力強さを加える。御活動を期待している。

SUR LA JURNALISMO

新聞雑誌とエスペラント

新

聞

新京日日 4. 14. 「言語の國防——荒川古道」——日本の立場からの國際語の必要を説き、エスペラントに及ぶ。(新京エス會報)

奉天毎日 4. 18. 「日本書紀のエス語翻譯・野原氏に小坂賞」。(上山政夫氏報)

九州帝國大學新聞 5. 20. 「エスペラント語開講さる——日本語の勢力範圍擴張へ——更にまた外語研究の基礎へ——講師は農科の大島教授」——九大エスペラント會の講習會について。(野見山丹次氏報)

九州日報 5. 26. 「躍進熊本市に讚嘆觀光案内書の注文——ハンガリーのラツツコー氏が——“Esp. Internacia”記事の、その後の反響について。(市原耿路氏報)

九州新聞 5. 26. 「われらのクマモト愈よ國際觀光都市へエス語案内注文殺到」。同上。

東京朝日 (神奈川版) 6. 1. 「“技術日本”を背負ひ遙々アフガニスタンへ縣廳の圖工・坂本ハルエ嬢」——R.O. 7月號に報道の坂本嬢について、トップに寫眞入りで書いたなかに、「アフガニスタン、インドの同志を訪ねてエスペラントを通じて日本の聖戰の目的を説明理解させる積りだといふ」とある。

朝鮮日報 6. 22-23. 學藝面に「エスペラント辯解——進藤靜太郎(金滄振譯)」。同紙 5. 14-15 「朝鮮の過去と未來——金亨奎」に「高邁なる理想の下に人智の技巧を盡したエスペラントも、早自然消滅の運命に當つて居るのではないか」とあるに對し反駁。(高允鎮氏報)

大阪毎日 (宮崎版) 6. 24. 「八紘一字の精

滿洲國觀光案内記作成を計畫し、目下資料蒐集中。

宮崎巖氏 6月12日奉天より來京。14日夕、水曜日例會を宮崎氏の歡迎會として國都グリルで宮崎氏、荒川氏を中心に歡談。氏の aludplenaj paroladoj は、われわれを啓蒙すること甚だ大。出席者、上記の外中村、駒見、金の諸氏。そして山縣嬢及び田中。15日夕、住吉氏夫妻訪問。歡談。

神を全世界に宣揚する——日本エス語大會を機に」來年度宮崎大會の企劃と日程。

雜

誌

文藝 7月號「近頃面白く讀んだ洋書」(ハガキ回答集)のなかにセルマ・ライエルレヨフ『將軍の指環』(エスペラント譯)——三宅史平。

圖書 6月號「海外文化ニュース」欄中、「ジョイスの新作」に、ジェームス・ジョイスの新作「フィニガンのお通夜」のなかに、「ユリシーズ」とおなじように、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、オランダ語、フランス語、サンスクリット、エスペラント等が飛び出すとある。(袴田俊雄氏報)

和歌山師範校報 第14號 (5. 29.) 「友邦イタリー便り (エスペラント會前田米美翻譯)」。

慈光 6月號「佛教とエス語——協坂圭治」佛教の本質とエスペラントの精神の相似について。

新協劇團 6月1日臨時號「『神聖家族』のフキ子——吉屋信子」に、「彼女が、いま良人とエスペラントを覺えるといふこと一つにさへ、生活向上の教養をひたむきに、それへ結びつけて、しがみつく態度は、涙をそそるほど、あはれ深くさへある。」

新

刊

書

少年歳時記 (松竹大船映畫「花ある雜草」の原本)に「水野は辨當を食べてしまふと(略)今日届いた和蘭から來たといふエスペラント雑誌に讀みふけてゐた。」(p. 138) (土居盛男氏報)

16日丁度田舎から出て來られた松本氏と同道、松本氏の勤務地勸農山に赴かれ滿人農村の視察。

16夜哈爾濱へ出發された。

毎金曜日午後7時から荒川氏宅での初等者の集りは小股、青柳、金の新人を得て、「エスペラント講座」で勉強中。

(新京エスペラント會 adreso:

新京市祝町 2-14)

(347)

小坂賞委員會報告

事變國債買入

小坂賞基金は、募集をはじめてから約半年餘で、豫定金額 1,300 圓を 100 圓以上も突破いたしました。諸雜費、第 1 回賞品費等差引きまして、6 月末の現在高 1,272 圓 72 錢、このうちから事變國債（額面 1,200 圓）を買入れ、一面において新東亞建設途上の國費の 1 部にあてるとともに、これの利息をもつて、毎年度賞品製作費および經常費にあてることといたしました。

訂正 6 月號報告中「第 16 回九州エスぺラント聯盟大會 13 口」とあるは「3 口」の誤りにつき訂正。よつて合計金額は 4 月末現在 1,988.円50、5 月末 1,410.円00 と訂正。

寄附 (6 月中)

蒙疆 淵田多穗理 10円 5.円00
6 月末合計 1,415.00

收 入	
一般寄附金	1,415.00
指定寄附金	30.00
利 息	6.09
合 計	1,411.09

支 出	
賞品製作費	30.00
副賞費	30.00
懸賞費	40.00
振替手数料	8.46
印刷費	26.66
通信費	20.27
消耗品、雜費	12.98
合 計	168.37
差引現在高	1,282.72

現在高内譯

事變國債(額面 1,200圓)	1,176.00
銀行預金(安田貯蓄)	60.00
振替口座基金	10.00
振替口座	1.17
現 金	35.55

本郷だより

今月は、大會の Protokolo に 20 ページさきました。

去年までは Protokolo だけページをましましたのでしたが、ことは、用紙制限の趣旨にしたがつたのです。

そのため、大會から渡された Protokolo 印刷費が浮びあがりますが、7 月から R.O. 印刷費があがり、豫算に不足を

來たしましたので、その穴埋めの 1 部にあてることとしました。

個 人 消 息

結婚・出生

桑原利秀氏(小坂賞委員會幹事)は 5 月結婚された。

竹中治助氏(名古屋エス會)には、6 月 6 日長男出生、燦太郎(Santalo)と命名。

轉 職

小野田幸雄氏(元學會評議

員)は歸京、東洋製鋼所へ入社
原田三馬氏(同)は室蘭三ツ輪運輸株式會社へ。

土師孝三郎氏(同)凱旋して日本電氣株式會社へ入社。

住 所 移 動

佐々城佑氏(學會理事)は地番變更。新地番: 3 丁目 293.

哀 悼

露木清彦氏(前學會評議員)6 月 15 日死去、數え年 33.

毎月一回
一日發行

エスぺラント

第七年
第八號

昭和十四年七月十日 印刷第本
昭和十四年八月一日 發行

編輯兼
發行
印刷人

大 井 學
竹 田 佐 藏
東京市神田區三崎町二ノ四

定價一部20錢・送料5厘

6 月分 1 圓 20 錢・送料共
1 年分 2 圓 40 錢・送料共

印刷所

一 匡 印 刷 所
東京市神田區三崎町二ノ四

發行所 財團 日本エスぺラント學會 振替東京 11325
所 東京市本郷區元町 1 丁目 13 番地 4 電話小石川 5415

LA XXVII-a KONGRESO
de
JAPANAJ ESPERANTISTOJ

Osaka, 28–30 Aprilo, 1939

OFICIALA PROTOKOLO



Pendtelero por Ossaka-Premio

Desegno: Isikawa-Kōsuke Bakado: Miyanaga-Tōzan

Osaka Esperanto-Societo



Partoprenantoj de la XXVII-a, Osaka

Antaŭ la kongresejo, Centra Publika Halo.

LA XXVII-a KONGRESO

de

JAPANAĴ ESPERANTISTOJ

Osaka, 28-30 Aprilo, 1939

OFICIALA PROTOKOLO

La Unua Tago (*Vendredo, 28 Apr., 1939*)

LA ANTAŬKONGRESA VESPERO

en Osaka-Waseda-Klubo.

La solena malfermo de la 27-a okazos morgaŭ matene, sed multaj entuziasmaj partoprenantoj jam antaŭvespere alvenas la urbon el diversaj lokoj de la lando. Ĉu ni povas ilin lasi sen bonvenigo? Ne! Tion ne permesas la gastama membraro de O.E.S., kiu invitis al si la kongreson post dekjara ripozado. Do la Antaŭkongresa Vespere, modesta, sed varma, estas aranĝita en la salono de la klubo.

Post komuna vespermanĝo, sub la sprita prezido de S-ro Itô-Kôiti, sekvas la bonvena saluto de Prof. Nakanome-Akira, la ĉefkomitatano de la organiza komitato. Post ĝi granda ĥoro de "Al la Fratoj", prezentiĝo de ĉiuj kunvenantoj laŭ la voko de S-ro Ŝindo, kaj interesaj paroladoj de spertaj sinjoroj pri la donitaj temoj: kiamaniere aranĝi kunvenon (S-roj Matuda el Osaka, Miyamoto el Kôbe, Asano el Nagoya, Nozima el Kioto), kurson (S-roj Nukina el Osaka, Ossaka el Nagoya), propagandon (S-roj Itô el Osaka, Kuwahara el Osaka), organizon (S-ro Ikegawa el Osaka), kaj ceteraj problemoj pri la esperanta movado (S-roj Yokota el Osaka, Nakahara el Kioto, Ŝindo el Osaka, Mijake el Tokio).

Intertempe "Rideaŭskultata Ĥoro", la muzika fako de O.E.S., amuzas la vesperon per kelkaj belaj kantoj, kiuj akiris tian bonan sukceson, ke ĉe ĉiu kanto oni forte aplaŭdis kun "bis! bis!"

La vespero finiĝas en gaja humoro kaj la ĉeestantoj disiĝas kun plia espero al la morgaŭa soleno.

LA KONGRESO

en la Centra Publika Halo.

La tagon favoris belega vetero. En la parko ekster la masonita konstruaĵo regas la milda printempa kvieteco. Sur ĝia alta muro pendas longa flagrubando, kies dikajn literojn oni legas de malproksime: La 27-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj. Dume la halo, antaŭ la kongresa akceptejo bruas amaso da homoj, la popolo de verda mondo. La verdaj steloj sur la brustoj de la partoprenantoj fieras pro sia gloro kaj venko. Jen ĝoja manpremo, jen vigla interparolo: Esperanto disflugas en la nunjara metropolo de la verda popolo. Je la 9-a la sonorilo anoncas la malfermon.

La Ceremonio de la Naskotago de Lia Imperiestra Moŝto.

La kantado de nacia himno "Kimigayo".

Riverenco al la Imperiestra Palaco de malproksime.

Silenta preĝo por nia militistaro.

Trifoja "Banzai" por Lia Imperiestra Moŝto.

La Malferma Soleno.

Oni elektas Prof. Nakanome kiel la prezidanton, kaj Sinon Kidosaki-Hinako, S-ron Kusakari-Takesi kaj S-ron Ŝindo-Seitaro kiel la vicprezidantojn.

S-ro Kozima-Sōiti, reprezentante la organizan komitaton salutas:—

Estimataj Gesamideanoj!

Mi havas la plezuron vin saluti en la nomo de la organiza komitato de la 27-a Kongreso.

Pasis jam ses monatoj de post ni promesis en la lasta kongreso en Nagoya inviti la kongreson de tiu ĉi jaro al nia urbo.

Estas al ni la plej granda honoro, ke ni povas havi refoje la tradicion kongreson de japanaj esperantistoj en nia urbo Osaka, centro de industrio kaj komerco de la progresanta Japanujo, post dekunu jaroj depost ni havis ĝin por la unua fojo.

En la komenco de Decembro en la lasta jaro la organiza komitato estis konsistanta el ses membroj sub la ĉefo de Prof. Nakanome-Akira, la prezidanto de nuna kongreso kaj en la komenco de Aprilo nunjara ĝi grandigis sian skalon kaj havis pli ol tridek membrojn. Dume la organiza komitato okazigis

viglajn preparakunsidojn jam dekelkajn fojojn.

Ni kunlaboradis kun granda streĉo kaj arda espero, rekonigi tra la kongreso al la publika amaso la sanktan signifon de nia movado, jam ne parolante pri la poresperantistaj aferoj, kiel ili estis en antaŭaj kongresoj.

Je la sojlo de la rekonstruado de la Oriento, ni penadis kaj klopodadis tage kaj nokte, por havi ian novan entreprenon en tiu ĉi kongreso, kvankam nun nia lando estas en neordinara tempo.

Mi esprimas dankon el la profundo de mia koro, reprezentante la organizan komitaton, ke ni sukcesis havi la kongreson tiel grandskale dank' al la fervora subteno de la turisma fako de la urbo, dank' al la konstanta kaj energia kunlaboro flanke de la samideanoj, kaj dank' al la aktiva partopreno de tiel multaj kongresanoj.

Esperante vian bonfarton kaj ĝiskoran ĝuadon en la kongreso mi finas mian saluton. Dankon!

Prof. Nakanome, la prezidanto, salutas:—

Estimataj Gesinjoroj!

Estas al mi granda ĝojo, ke mi povas vin bonvenigi kaj saluti en ĉi tiu ĉambro. Vi estas venintaj el proksimaj kaj malproksimaj urboj por fortigi kaj vigligi nian kongreson. Estas treege kortuŝe, ke mi povas saluti multajn partoprenantojn el Manĉulando.

Gesinjoroj! Vi volas min elekti kiel la prezidanton de la nuna kongreso. Mi timas tamen ke la ofico estas al mi tre grava, sed mi volas kun ĝojo akcepti, nur sub la kondiĉo, ke vi, gesinjoroj, ĉiuj min helpos, ĉar mi ne estas tiel juna kiel vi, sekve mi ne povas paroli esperante tiel flue kiel vi.

Gesinjoroj! Mi legis antaŭ kelke da tagoj la paroladon de D-ro Zamenhof ĉe la Oka Kongreso en Krakovo en la jaro 1912. Li diris:—“... Antaŭ dudek kvin jaroj mi timeme demandis min, ĉu post dudek kvin jaroj iu el la mondo scios ankoraŭ, ke ekzistis iam Esperanto, kaj—se Esperanto vivos—ĉu oni tiam povos ankoraŭ kompreni ion, kio estis skribita en Esperanto en ĝia unua jaro, ka ĉu angla esperantisto povos kompreni esperantiston hispanan...”

Nun, nia lingvo ne nur ekzistas pli ol 50 jarojn, sed ĝi ĉiam kreskas kaj ĉiam disvastiĝas. Tial mi povas diri: se D-ro Zamenhof estus ĉi tie inter ni, kaj vin vidus, verŝa ne li ne kredus siajn okulojn, kaj dirus: “Tio estas sonĝo”.

Samideanoj! Al la urbo Osaka, kiu montris por nia afero morale kaj materie grandan amikecon, mi esprimas en via nomo koran dankon. Samtempe multaj eminentuloj de la urbo donis al ni la favoron fariĝi la konsilantoj de

la kongreso. Ĉi tiujn sinjorojn mi sincere dankas.

Laste, gesinjoroj anoj de la prepara komitato klopodis sindone tage kaj nokte post la pasinta Januaro. Mi esprimas al ili koran dankon. Se nia kongreso sukcesus, tio estos la frukto de la klopodo de tiuj ĉi komitatanoj.

Fininte mian saluton kaj dankon mi diras al vi, sinjoroj kaj sinjorinoj, ankoraŭ unufoje.

Bonvenu! Bonvenu!

S-ro Ossaka-Kenĝi, Nagoya, reprezentante la ĉeestantaron, salutis:—

Mi salutis al vi en la nomo de ĉiuj partoprenantoj en tiu ĉi kongreso. Antaŭ ol fari kutiman oficialan saluton al la estraro de la organizantoj de la kongreso, mi, kiel reprezentanto de Nagoya Esp.-Societo, esprimas mian plej koran dankon al la partoprenintoj de la lastjara kongreso en Nagoya...

Osaka estas pli granda ol Nagoya, ankaŭ la nombro de esperantistoj estas multe pli granda. Kiam ni havis en ĉi tiu urbego nian kongreson por la unua fojo ĝuste antaŭ dekunu jaroj, tiutempe la publiko ankoraŭ ne estis favora. Ni havis inter ni specialajn uniformojn, tamen hodiaŭ ni ne vidas oficistojn en uniformo kun sabro ĉe la flanko. Tio montras ke la publiko en tiu ĉi urbo faris grandan progreson.

Ne nur kara Majstro, sed ankaŭ ni ne povis antaŭvidi ĉi tian grandan ŝanĝon. En 1915, antaŭ pli ol dudek jaroj, mi trovis nur S-ron Tanaka-Katuzô, kiu estis kompaniano, kaj S-ron Tuzi-Risuke, kiu estis delegito de U. E. A., tamen ili nun ne estas en Osaka. Kaj en la urbo Sakai S-ro Sakagami estis la sola samideano. Komparante tiujn faktojn al la hodiaŭa sukceso ni vidas ke japana esperantujo faris vere saltan progreson.

Por fini mian saluton mi elkore dankas al la estraro kaj la samideanoj de Osaka.

La sekretario legas la gratulelegramon de S-ro Kubo-Teizirô el Mediteraneo, kaj raportas la nombron de la tuta partoprenantaro.

S-ro Mijake-Ŝihej raportas pri la agado de la ekzamena komitato:—

Laŭ la proponoj de O. E. S. kaj N. E. S., J. E. I. organizis la kontroladon de kapableco de esperantistoj, kaj 12-an de marto ĝi okazigis unuan ekzamenon pri elementa scio, al kiu sin prezentis 49 gesinjoroj, kaj ili ĉiuj sukcesis.

S-ino Nohara-Nobuko, Osaka, reprezentante la sukcesintojn, ricevas la atestojn de S-ino Kidosaki, la vicprezidantino. (granda aplaŭdo).

S-ro Kuwahara-Tosihide, sekretario de la komisiono por Osaka-Premio raportas:—

12 (354) En la lastaj du jaroj la mondo ekstere travivas la plej grandan trans-

formadon, kiun nia lando iam vidis. Ne malpli grandan ŝanĝon spertis nia Esperanto-movado en Japanujo en la lasta duonjaro. Du plej grandaj ŝanĝoj, kiuj frapas niajn okulojn, estas la fondo de la sistemo de Ekzameno pri la kapableco de esperantistoj kaj la fondo de "Ossaka-Premio", mi kredas.

Kiel vi jam bone scias, en la lasta Kongreso en Nagoya en Okt. estis akceptita la propono de O. E. S. pri fondo de "Ossaka-Premio" por memorigi eterne la grandan meriton de S-ro Ossaka-Kenĝi en la japana Esperanto-movado, kaj la Kongresa Prezidanto nomis 17 gesinjorojn kiel la membrojn de la speciala komisiono por la premio. Jam en la Kongreso 8 samideanoj el la nomitoj havis kunvenon kaj konsiliĝis pri fundamentaj principoj de la regularo de Ossaka-Premio kaj ĝia Komisiono, laŭ kiuj 4 komisionanoj kunvenintaj en Osaka tuj post la Kongreso pretigis la regularon, kiu estis poste aprobita de ĉiu komisionano. La tutan tekston vi legas en la Decembra n-ro de R. O., 1938. Laŭ propono de 4 komisionanoj el Nagoya kaj Osaka, la komisiono kompletigis sin per 7 novaj membroj kaj ĝi komencis labori energie.

Kiel fundamentan monon por la premio la komisiono varbis monoferon de 1300 en, kaj la sumo estis tre rapide kolektita en unu monato kaj duono. Tiu ĉi fakto tre bone spegulas, kiel grandaj kaj influaj estas la laboroj faritaj de S-ro Ossaka por nia movado.

La desegnaĵojn por la premia pendotelero estis varbita de la komisiono eĉ el neesperantista mondo. Laŭ la desegnaĵo de S-ro Isikawa, neesperantista desegnisto, kun modifo de Prof. Motono, la selektinto, la telero estis tre bone farita en la fabriko de S-ro Miyanaga-Tôzan, fama porcelanisto en Kioto.

Kiel kandidatoj por la unua premioto, 9 gesinjoroj estis prezentitaj de esperantistoj kaj esperanto-organizaĵoj. Pri la prezentitaj 9 kandidatoj la komisiono faris interŝanĝon de opinioj kaj post zorga konsiliĝo per multaj cirkuleroj, ĝi rekomendis S-ron Nohara-Kyûiti kiel la unuan premioton pro la kompletigo de esperantigo de KRONIKO JAPANA.

Naskita antaŭ 69 jaroj en la jaro 1871, esperantisto de 1906, li montras konstantan aktivecon al nia afero. Jam de fruaj jaroj li kunlaboris al Franca Esperantisto, Internacia Pedagogia Revuo ktp., kiam ankoraŭ japanaj esperantistoj ne kutimis rilatiĝi internacie. De lia plumo ni legas la klasikajn verkojn de Konfuciismo, Budaismo kaj japana literaturo en esperanta vesto. Se ni konsideras, ke la grandioza laboro traduki KRONIKON JAPANAN estis farita per la sola forto kaj per propra kosto de la veterano jam tiel maljuna, ni junuloj devas honti antaŭ li. Li estas por ni bonega instigilo por eterne. Grandaj kaj multaj estu la laboroj de liaj postsekvantoj.

S-ro Nohara-Kyûiti kun granda aplaŭdo ricevas la Oosaka-Premion de Sino Kidosaki, la vicprez.

La Parolado de S-ro Nohara, la premiito. (Vidu: R. O. n-ro 7, p. 293).
(ripozo dum kvin minutoj).

La Laborkunsido.

Oni elektas S-ron Nukina-Yositaka kiel la prezidanton de la laborkunsido, malfermata je 10.30.

Prezidanto:—Ŝanĝante la programon unue mi petas la specialan paroladon de S-ro Ogasawara-Yosio el Wakayama.

La Speciala Parolado de S-ro Ogasawara-Yosio.

Prezidanto:—Nun estas prezentata urĝa propono, ke ni kongresanoj dankesprimu al la urbo. Reprezentante la proponintojn, S-ro Siraki el Nagoya parolos.

S-ro Siraki-Kinmatu, Nagoya:—Ni proponas jenan dankesprimon al la urbo Osaka okaze de tiu ĉi kongreso. Bonvole nin subtenu (legas la sekvantan rezolucion).

感謝決議 大阪の近時我國經濟上否國際經濟上における地位の向上は誠に目覺ましきものあり。而も經濟の根柢はその性質上經濟以外の諸般の認識と把握にあることを思う時、大阪の近時文化的諸事業に對する深き關心の故なきにあらざるを知る。

この意味において我等第二十七回日本エスペラント大會に集る者ひとしく、厚き庇護を與えられたる府市當局ならびに今回の名譽顧問によつて代表せらるゝ大阪各方面の我が運動に對する理解と援助とを厚く感謝し併せて大阪文化進展のため、今後更に協力せんことを誓ふものなり。

La rezolucio estas akceptita kun unuanima aplaŭdado.

(A) Propono de Kobe Esperanto-Asocio:—

“La Kongreso akceptu Japanan Esperanto-Instituton kiel la centran organizon de la Esperanto-Movado en Japanujo.”

D-ro Tukimoto-Kitazi, Kobe:—

Kvankam ni kredas, ke neniu havas kontraŭan opinion por la fundamenta ideo de ĉi tiu propono, tamen ni volas fari kelkajn klarigojn.

De 1919 J. E. I. faris eblajn klopodojn fariĝi vere centra organizo en nia lando kaj efektive nun ĝi povis atingi ĉi tion kaj fakte ĝi estas praktika centra organizo de nia movado. Sed J. E. I. estas leĝa persono, kies agoj ĉiuj devas observi ĝian regularon kaj certan limigon. Jam J. E. I. aliĝis al I. E. L. kiel nia landa asocio. Inter landa asocio akceptita de I. E. L. kaj la centra organizo rekonita de la tuta volo de enlandaj esperantistoj troviĝas diferenco.

Sed feliĉe ĉe ni ĉi tiuj du organizoj perfekte koincidas.

Ankaŭ rigardante la kongresan historion, ni konstatas, ke ne nur esperantaj grupoj, sed ankaŭ individuaj esperantistoj ne nur kun la celo scienca, sed ankaŭ kun la celo religia, ne nur la membroj de J. E. I., sed ankaŭ tiuj, kiuj ne havas la membrecon, povis partopreni en la kongreso, kaj ĝuante mildan atmosferon kaj perfektan harmonion ili povis pritrakti nian estontecon. Sole la aferoj aprobitaj en la kongreso esprimas la tutan volon de la japana esperantistaro.

Do, kiel praktiki? Depost la kongreso en Okayama prezentiĝis al ni multaj provoj, kiuj intencis fari la kongreson konstanta organizo kaj lasas al ĝi praktiki la rezoluciojn de la kongreso. Sed tiaj provoj neniam efektiviĝis pro diversaj malfacilaj cirkonstancoj. Tamen la kongreso faris iom post iom grandan progreson en alia signifo, tio estas en la spirita flanko. Kaj fine en la kongreso en Nagasaki, unuanime estis akceptita la fondo de la komisiono por la kongresa regularo kaj nun en ĉi tiun kongreson estas prezentita la epokfara projekto de la regularo, prilaborita sub atentaj traktadoj de la komisionanoj. En ĝi ni klare vidas, ke en la kongreson speguliĝas la tuta volo de la japana esperantistaro kaj ni ankaŭ vidas la japanan kongreson la spirita centro. Sekve la projekto estas klara tekstigo de firma subteno al J. E. I. de la kongreso.

Ni tre ĝojas, ke ĉi tiu projekto principe koincidas kun la prova projekto por kongresa regularo jam antaŭe publikigita de Kobe Esperanto-Asocio.

Jen, la du starpunktoj, kaj de la kongreso kaj de la instituto, estas perfekte klaraj, estante du en unu kaj havante nedivideblan interrilaton. Ili mem povas libere marŝi antaŭen kun siaj propraj karakterizoj en plena harmonio.

Ĉi tie ni kredas ke ne nur por danki al la instituto, kiu marŝis sur dorna vojo jam de dudek jaroj, sed ankaŭ estonte por plenumi niajn volojn, estas prave kaj rezoneble fari rezolucion, ke ni subtenu la instituton kiel centran organizon de la Esperanto-Movado en Japanujo.

Gesinjoroj! Ni ankaŭ iom timas, ĉu troviĝos en unu flanko tiuj, kiuj asertas, ke J. E. I. jam estas centra organizo, do ne estas necesa tia rezolucio. Sed tia opinio estas nerezonebla laŭ nia konvinko, ĉar ni faras la proponon ĝuste pro tio, ke J. E. I. jam firme ekzistas kiel centra organizo de la Esperanto-Movado en Japanlando, kion prave asertas ankaŭ J. E. I. mem jam de longe.

Ni tre esperas, ke vi unuanime aprobu nian proponon.

S-ro Hazi-Kōzaburō, Kanazawa:—Kia estas la centra organizo, kaj kian (357)

rilaton ĝi havas kun la kongreso?

D-ro Tukimoto:— Laŭ mia kompreno la signifo de la centra organizo estas memkomprenebla. Tia esploro eble ne estas necesa ĉi tie. La dua demando estas ĝenerala problemo, sed ni ĉiuj ĉiam klopodas por prosperigi esperantan movadon. Certe estas necese, ke iu organizo ekzistu, kaj por tio antaŭ ĉio ni havu la centran organizon, alie diversaj movadoj estos laŭ diversaj manieroj, kaj tio ne estos bona rimedo por la ĝenerala movado.

La propono estas akceptita kun plimulto, kaj sekvas la danksaluto de S-ro Mijake, la ĝenerala sekretario de J. E. I., pro la akcepto.

S-ro Mijake:—Ĉar la propono ankoraŭ ne estas montrita al la estraro, ĉial mi ne povas antaŭdecidi nian sintenon, sed la propono estas donita tute bonkore, kaj mi elkore dankas al la proponintoj kaj al ĉiuj, kiuj subtenis ĝin. Mi transdonos vian bonkorecon al la estraro.

(B) Propono de S-ro Ŝindo-Seitaro, koncerne Kongresajn Regulojn: Projekto de Reguloj pri la partoprenantaj societoj kaj Projekto de Reguloj pri la rezolucia komitato.

S-ro Ŝindo-Seitaro, Osaka:—

La du proponoj estas jam publikigitaj antaŭ monatoj, kaj mi kredas, ke ĉiuj ĉeestantoj ne bezonas denovajn ripetojn, do mi parolos nur pri plej aktualaj aferoj kaj la fundamentaj ideoj principaj.

Konsideru, antaŭ ĉio, ke en la venonta jaro nia 28-a okazos en Miyazaki por festi la 2600-an jaron de Japanujo, kaj ke sekvos aliaj lokaj urboj por inviti la estontajn kongresojn. Por havi niajn kongresojn en tiuj lokoj ni, antaŭ ĉio, devas posedi firman bazon financan laŭ racia metodo. La ideoj enhavataj en la reguloj, ja, celas ilin. Kaj vidu, iliaj realigoj ne apartenas nur al teoriaj paroloj senbazaj, sed ilia realigo jam estas parte efektivigitaj en la ĝisnunaj kongresoj per bonvolaj monoferoj. Do, kial ne aranĝi la saman aferon en bona ordo? La taskoj de la Rezolucia Komitato, ankaŭ, estas klaraj, ĉar ĝi prenos sur sin tiujn laborojn, por kiuj ni jam forte sentas neceson de orda laborado.

Nun estas la plej favora okazo por realigi tiujn praktikajn aranĝojn, tre bezonatajn por niaj kongresoj. La detaloj disvolviĝos jaron post jaro kaj dum la efektiva aplikado ĉio certe proksimiĝas al pli perfektaj formoj. Fidu, do gesinjoroj, tiun progreson de la afero, kaj vi akceptu la proponojn.

S-ro Ossaka-Kenĝi, Nagoya:—Koncerne la proponon (B) mi demandas.

(358) 1) Ĉu la proponinto ne opinias, ke la jara kotizo po membro, 1 en, estas tro granda sumo por la esperantista grupo en la nuna stato? 2) Ĉu ne

okazos aĉeto (aŭ subaĉeto) de la voĉoj per monofero individua, se iu grupo volas nepre voĉdonigi sian proponon prezentatan? Ĉar la propono (A) prezentita de Kobe-samideanaro, estis ĵus akceptita, ĉu ne estus pli bone prokrasti la decidon de la propono (B) ankoraŭ unu jaron, lasante ĝin al la denova reprijuĝo de la esperantistaro?

S-ro Ŝindo:—Mi tre volas ŝpari tempon, tial post ĉiuj demandoj mi resume respondos.

S-ro Ikegawa-Kiyosi, Osaka:—Tiu ĉi propono rilatas al la ekonomio. La kotizo estas kara. La kareco estas mia demando.

S-ro Matuda-Syūzi, Kanazawa:—Pardonu al mi, ke mi ne povas tute aprobi la proponon kaj mi devas kontraŭdiri al li. Sed mi sentas kiel ankaŭ li, la neceson subteni la kongreson per iu organizo, precipe kiam ĝi estos havata ĉe iu loka urbo. Sed al mi ŝajnas ke la plano de S-ro Ŝindo estas malfacile efektivebla. Kaj mi deziras proponi kiel jene:—

Ni organizu subtenan societon por la kongreso. Mi provizore nomas ĝin Societo “Amikoj de Kongreso”. La membroj konsistu el volontuloj. Oni ne devigu partopreni aŭ ne, aŭ pri la monsumo oferota. Laŭ siaj deziroj, laŭ siaj kondiĉoj ili oferu, kiom ajn ili deziras. Per tia maniero oni povos kolekti sufiĉe da mono sen malfacileco, kaj sen ia ajn sento de ŝuldo aŭ devo.

S-ro Nozima-Yasutarō, Kioto:—Laŭ la projekto la lokaj grupoj devas pagi unu enon po kapo proporcie al la nombro de la membroj, en la kason de la kongreso. Tio estas tre grava afero por la loka esperanto-movado, kaj tio devus okazi post pli detalaj konsideroj, ĉu tio ne malhelpos la viglecon de la loka movado. Ĉiuj lokaj grupoj havas sian specialan cirkonstancon. Tial oni decidu pri la pago kaj la monsumo post detala pripensado rilate al tiuj lokaj cirkonstancoj. Tial mi aprobas la proponon de S-ro Osaka, ke ni prokrastu la decidon. Kaj dum tiu unu jaro ni povos pli detale esplori la interrilatojn inter la decido kaj la loka esperanto-movado.

S-ro Matuda, Kanazawa, denove parolas pri malfacileco de efektivigo.

S-ro Itō-Koiti, Osaka:—Oni legis tiun ĉi proponon jam sur R. O. La kongreso rilatas ĉefe al financo. Se la propono estos akceptata, lokaj grupoj, ne sole de ĉefaj urboj, sed de provincoj eĉ malproksimaj povos facile inviti al si la kongreson. Tial mi aprobas la originalan proponon.

S-ro Ikegawa, Osaka:—La propono estas tre internacia, epokofara, sed malfacila. Prezidanto bonvolu ĝin komisiu al speciala komisiono.

S-ro Ŝindo:—Mi ne komprenas, kial mi publikigis la proponon jam de antaŭ kelkaj monatoj sur R. O. Estas domaĝe, ke la opinioj ĝisnun prezen- (359

titaj estas tro palaj, kaj ne prezentas ion pozitivan por aldoni utilajn amendojn. Mi deziras, ke vi alportu pozitivajn ideojn por plibonigi la originalojn anstataŭ fari palajn parolojn tro abstraktajn.

Prezidanto :—Al mi ŝajnas, ke jam sufiĉas la diskutoj. Mi volas nun decidi por aŭ kontraŭ. Tiuj, kiuj kontraŭopiniis la proponon, levu la manojn (13 levas). Kaj tiuj, kiuj aprobas, ankaŭ levu la manojn (25 levas).

La kontraŭopinioj estas malpli ol la aproboj, do la propono.... (S-ro Akata el Kioto petas parolon).

S-ro Akata-Kumayosi, Kioto :—La ĝeneralajn principojn mi akceptas, sed ne la proponon en la originala formo. Kvankam mi ne povas detale prezenti perfekte formitan amendon, mi aprobas eventualan amendon.

S-ro Kuwahara-Tosihide, Osaka :—Oni jam bone konas, ke tia fundamenta problemo estas nepre solvota, sed pro la malfacileco neniu prenis sur sin la problemon, tial mi esprimas mian profundan respekton al la proponinto. Ĝus 25 aprobis, kaj 13 kontraŭis, sed la ceteraj ne montris la opiniojn. Eble la propono estas ankoraŭ ne komprenata de ili, kvankam ĝi jam de antaŭe aperas sur R. O. kaj tial ili ne povas partopreni la diskutadon. Mi do proponas jenan movon :—

“La ĝeneralajn ideojn fundamentajn la kongreso akceptas, sed la diskutadon pri la detaloj la kongreso komisiu al la malgranda komisiono, kies membrojn nomu la kongresa prezidanto, kaj tiu komisiono prezentu la definitivajn planojn en la sekvanta kongreso.”

Prezidanto :—Mi juĝas, ke pli multaj, kiuj nek kontraŭis, nek aprobis, samopiniis kun S-ro Kuwahara, kiu nun proponis la movon. Do mi trovas ke ĝi estas akceptita. (aklamo).

(C) Propono de Miyazaki-Esperanto-Societo kun la subteno de Kyûsyû-Esperantista Ligo.

“Inviti la dudekokan Kongreson al urbo Miyazaki, memore al la jaro 2600 de Japania Kroniko.”

S-ro Nakagawa-Syôhati, Miyazaki :—

Kiel jam anoncite, ni proponas al vi, ke nia venonta 28-a kongreso havu lokon en Urbo Miyazaki. Venontan jaron en Miyazaki, en Hyûga, la hejmlando de niaj prapatroj, oni okazigos solenan feston por memorigi la 2600-an jaron de japana erao, kaj ankaŭ oni havas multajn memorigajn aferojn. Kaj okaze de tio multaj asocioj aŭ grupoj ĉiuspecaj en la lando havos iliajn jarajn kunvenojn en la nomita urbo. Karaj ĉeestantoj, ni arde esperas ke ni japanaj esperantistoj ankaŭ havu nian jaran kongreson sur la benata tero. Kvankam

nia grupo en Miyazaki ne estas tre forta, tamen per la fervora subteno de tutkiuŝua samideanaro, kio estas jam montrita al ni, ni kredas ke ni povos sufiĉe bone prepari por la venonta kongreso. Ni esperas kaj forte deziras, ke vi bonvolu aprobi nian proponon.

La **Propono** estas unuanime akceptita kun granda aplaŭdo. (noto: La invito de Tokia Esp.-Klubo venis al ni poŝte 29 Majo, kiam ĉiuj temoj estis jam finpresitaj.)

Raporto de la IEL-Komitatano.

S-ro Ŝindo, Osaka, faras la raporton pri Internacia Esp.-Ligo.

Ĝenerala Fotografado.

Komuna Tagmanĝo.

Sub la prezido de S-ro Ikegawa, Osaka, salutas la jenaj samideanoj:

S-ro Hasida-Keizô por Japana Esperantista Sciencista Asocio.

F-ino Kasiwabara-Hideko por Ligo de Esperantistinoj Japanaj.

S-ro Takahasi-Kikuzô por Japana Esperantista Ligo Fervojista.

S-ro Takami-Hiroshi por Tokia Esperanto-Klubo.

F-ino Arai-Sumiko por Fervojista Esperantista Rondo de Tokio.

S-ro Hosokawa-Takurô por Kiota Esperantista Ligo.

S-ro Nakagawa-Syôhati por Kiuŝu Esperantista Ligo kaj Miyazaki Filio de J. E. I.

S-ro Osaki-Kazuo por Japana Esperanto-Instituto.

S-ro Itô-Kôiti por Katakana-Zidai.

S-ro Kôduki-Yoshihiro legas la salutleteron de Ligo de Katolikaj Esperantistoj en Hungarujo.

S-ro Sumiya-Sinzô legas la salutleteron de S-ro Klemens Wiczorek el Germanujo, kiu ankaŭ dediĉis al la Kongreso memorigan muzikkomponaĵon.

S-ro Sibayama-Kei por Japana Budhana Esperantista Ligo.

S-ro Motono-Seigo, profesoro de Kyôto supergrada teknika lernejo, la ekzameninto de la desegnoj de pendotelero por Osaka-Premio.

S-ro Nakahara-Syûzi monoferas 5 enojn por la sekvanta kongreso en Mikazaki.

D-ro Yasuda-Tatuo, vicprofesoro de Medicina Fakultato de Universitato de Osaka.

ĜENERALA KUNSIDO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

S-ro Mijake-Ŝihej, la sekretario, kun la aprobo de la ĉeestantaro nomas S-ron Ōsaki-Kazuo, kiel la prezidanton de la ĝenerala kunsido.

Prezidanto invitas S-ron Mijake fari la raportojn pri la aktiveco kaj pri la kaso de la Instituto.

S-ro Mijake:—Antaŭ ĉio mi petas pardonon ke S-ro Mituisi, la direktorkasisto, ne povas ĉeesti pro la malsano, kaj mi lin anstataŭas en la raporto de la kaso, kies detalon vi vidas sur la disdonita flava folio.

Pri la aktiveco: (1) La kontrolado de la kapableco de esperantistoj. Pri tio ĉi mi jam faris klarigon, kaj do mi ne ripetas ĉi tie.

(2) La verkaro de S-ro Ossaka. Ni esperis aperigi la verkaron antaŭ la nuna kongreso, sed la tempospaco ne sufiĉis por tio. Por la unua volumo, ni transdonis al la presisto la manuskriptojn de la komentario por la Ekzerkaro, kaj ĝi eldoniĝos post 2–3 monatoj.

(3) La ŝanĝo de la regularo. La kunsido de la estraro decidis starigi novan oficsistemon, t. e. ĝeneralan sekretarion. Antaŭe ĝi ekzistis sub la titolo de “Syokityō”, sed la nova regularo ĝin tradukas “Syuzi”, kaj la estraro nomis S-ron Mijake kiel “Syuzi”, ĝenerala sekretario.

(4) La ŝanĝo de la interna regularo de la Instituto. Laŭ la decido en la lasta kongreso en Nagoya, la estraro de JEI konsideris la du proponojn, unu de TEK, ke Esperanto-Undō-Kōenkai daŭrigu sian funkcion, kaj la alia de NES, ke oni starigu novan societon por Esperanto-propagando (Nippon Esperanto-Bunka-Kyōkai), kaj decidis starigi novan fakon en la formo de Nippon-Bunka-Senyōbu (sekcio por diskonigo de la japana kulturo), kaj tial oni faris ŝanĝon de la interna regularo, enmetante la supran kiel la dekan sekcion de JEI. Mi petas vian aprobon. (aprobita).

Prezidanto:—Nu, iu havas ian demandon aŭ opinion pri la movado de JEI?

S-ro Nakahara, Kioto:—Preskaŭ ĉiutage aperas interesaj libroj en la mondo. Se JEI estas vera centro de la japana esperanta movado, havigu al ni ilin ĉiujn je la malkara prezo.

S-ro Mijake:—Jam hieraŭ vespere mi parolis pri la sama temo. Cetere mi petas sugeston de S-ro Nakahara pri la afero. Tamen al mi ŝajnas ke la afero estas tro malfacila.

S-ro Mijake:—Povas aŭ ne estas laŭ la cirkonstancoj.

S-ro Ossaka, Nagoya:—Aldone al S-ro Mijake, por akiri malkare librojn estas necese, ke oni altigu la valuton de japana mono, t. e. vigligu la industrion kaj komercon de Japanujo. (rido).

S-ro Itô, Osaka:—Pere de lokaj grupoj sendu mandatojn eksterlanden. Sed se la filioj mem tiel importos librojn, tiam JEI perdos la profitojn de libro-vendado, kiu ĝis nun kovris la mankon de la kaso de JEI. Tion mi timas.

S-ro Mijake:—Mi dankas pro la timo de S-ro Itô, pro lia bonkoreco por JEI. Mi cerbumis kaj ekhavis unu rimedon. Lokaj grupoj mendos rekte al la eldonejoj necesajn librojn, sed por tia malgranda sumo, oni ne donos tiom multe da rabato, kiom JEI ricevas por la opa mendo. Do, la rabaton donu al JEI. Kvankam tio ŝajnas senlabora profito, tamen JEI povos enporti per la sumigitaj rabatoj pli da libroj kaj tio utilos al la japana Esperantujo.

S-ro Ŝindo, Osaka:—Malcentrigu la monsendon. La fundamenta ideo estas tre simila al la traktata temo koncerne al JEI. Pago de membro-kotizoj frontas al gravaj malfaciloj. Disigu al lokaj centroj diversajn servojn ĝis nun centralizitajn en la mano de JEI. Kaj mi juĝas nun esti la plej bona momento fari praktikan decidon.

S-ro Ossaka:—La propono de S-ro Mijake estas tre bona. Tutan sumon de rabato mi oferos al JEI.

S-ro Mijake:—Ĉiu lin imitu!

S-ro Ossaka:—JEI dissendu cirkuleron al la eksterlandaj eldonejoj pri la afero por ke ili donu al JEI tutan rabaton por ĉiuj mendoj el Japanujo.

Prezidanto:—La proponoj estas gravaj. JEI konsiliĝu en Tokio.

S-ro Mijake:—S-ro Taki demandas per noto, ĉu JEI eksportas eldonaĵojn. Jes, sed tre malmulte. Ĝisnunaj eldonaĵoj ne estas tiel allogaj por eksterlandanoj, sed ni volas klopodi pli multe eksporti. En tiu ĉi jaro JEI estas preta reeldoni la Paroladojn de D-ro Z. sub la kompilo de S-ro Sasaki. Espereble ĝi estos vendata en granda kvanto.

Prezidanto:—Mi fermas la kunsidon per Ĥoro “Al la Esperantistaro”. La laborkunsido estas fermita je la 3-a.

La Turismo tra la urbo

La fruaj aliĝintoj havis privilegion vidi la urbon per la turisma motorŝipo, kaj la ceteraj vizitis la Planetarion.

La Ekzameno.

De h. 3.15 ĝis 5.15 okazis la Ekzameno pri la instruista kapableco de elementa kurso en la kongresa halo. Partoprenis 14 kandidatoj.

Vespermango laŭ la Fakaj Kunsidoj

En la mangoĉambro de la Kongresejo okazis fakaj kunsidoj, turisma, medicina, fervojista, scienca, Katakana-Romazia, budhana, virina, IELa, filatelista, antikominterna.

La Tria Tago (*Dimanĉo, 30, Apr., 1939*)

EKSKURSO AL TAKARAZUKA

La Laborkunsido

En la luksa ĉambro de Takarazuka-Hotelo, sub la prezido de S-ro Ŝindo, malfermata je 10.30.

Oni faris la raportojn de la Fakaj Kunsidoj okazintaj hieraŭ vespere.

S-ro Kusakari-Takesi, vicprez., en la nomo de la Kongresa Prez. nomas jenajn membrojn de la du komisionoj:

LA KOMISIONO POR OSSAKA-PREMIO

(會長) 大石和三郎, (副會長) 淺田一, (同) 佐々城佑, (幹事) 三宅史平, 進藤靜太郎, 川崎直一, (幹事) 桑原利秀, 岡本好次, 長谷川理衛, 中原脩司, 月本喜多治, 磯崎巖, 由比忠之進, 久保貞次郎, 白木欽松, 井川靜, 野村理兵衛, 八木日出雄, 植田高三, 杉田正臣, 高橋邦太郎, 塚田勝, 川原とき, 青木武造, 甲斐三郎

LA KONGRESA KOMISIONO 1939-B.

小坂狷二, 大崎和夫, 竹中治助, 宮本新治, 進藤靜太郎

Komuna Tagmango

S-ro Kusakari, vicprez., salutas en la nomo de Urba aŭtoritato, kaj parolas pri graveco de internaciaj entreprenoj turismaj kaj ilia rilato kun Esperanto.

Sekvas la salutoj de D-ro Oosima-Hirosi (Hukuoka), S-roj Ossaka-Kenĝi (Nagoya), Huzima-Tunetarô (Osaka), Izumi-Saizi (Yamaguti), F-ino Manzawa-Makiko (Tokio), S-ro Huzita-Akizô (Kôti) kaj Ges-roj Maier (Tientsin) (telegramo).

La Kongreso fermiĝas per la ĥoro "Al la Fratoj", kaj la kongresanoj vizitas la vodevilon prezentatan de ĉarmaj knabinoj en la granda teatro.

Gratulaj Telegramoj.

La Kongreso kun danko ricevis gratulajn telegramojn de la jenaj grupoj kaj samideanoj.

Oomuta Esperanto-Societo, Nagasaki Esperanto-Societo, Beppu Esperanto-Societo, Hukuoka-filio de J.E.I., S-roj Kubo el Mediteraneo, Tanaka-Kakutarô el Hôten, Nisihara el Oomuta, Kuribayasi el Matusiro, Okamoto-Joŝicugu el Keizyô, Araki el Oomuta, Takahasi-Kunitaro el Sizuoka, Sasaki-Tasuku el Tokio, Mituisi-Itumu el Tokio, Aisaka-Tadasi el Osaka, Ges-roj Maier el Tientsin.

會 計 報 告

會計委員 城戸崎益敏

收 入	
參加費 (229名).....	229.00
學會寄附金.....	60.00
個人寄附金.....	273.69
利子其他雜收入.....	2.17
合 計	554.86

支 出	
大會諸費用.....	416.61
諸補助費用.....	98.25
合 計	514.86
剩 餘 金	50圓

第 28 回日本エスペラント大會ニ寄附

支 出 細 目

- | | |
|---|--|
| <p>1. 準備費..... 23.94
準備委員會にて要せし諸費用, 外部の neesperantistoj との交渉に要せし諸費用等。</p> <p>2. 印刷費..... 86.72
kongreslibro, informilo, biletaro 其他 dokumentoj 一切の作製に要せし用紙, 封筒, 私製葉書並にその印刷費用等。</p> <p>3. 通信費..... 58.17
參加者又は參加勧誘の爲に發送せし kvitanco, informilo 其他 dokumento の送料及封入葉書, 諸外國に通信せる費用, 及び諸交渉に要せし切手, 電報料等。</p> <p>4. 會場費..... 57.35
大會事務所, 大會當日使用せし諸會場並に什器の借賃, 生花等の裝飾, 其他會場設備に要せし費用。</p> <p>5. 徽章費..... 95.19
kongreskarto, insigno 作製, 其</p> | <p>の附屬品に要せし費用。(但特志家の援助により此費用は實費より遙かに少額)</p> <p>6. 事務費..... 10.80
事務用品, 消耗品購入の費用。</p> <p>7. プロトコロ費..... 60.00
大會 protokolo を學會に依頼して印刷せる費用。</p> <p>8. 雜 費..... 24.44
出征者及び其の家族の參加費支辨, 外部より援助者其の他へ謝禮, 並にスタンプ, 振替貯金關係諸費, 交通費其の他の費用。</p> <p>9. 補助費..... 98.25
前夜懇親會, 午懇會, 市内觀光, 寫眞, 寶塚觀光, 寶塚ホテル午懇會等の切符賣上より實際支拂額を差引き不足分, 及び市電無料乗車券發行の爲に市當局へ納入せし費用。</p> |
|---|--|

大 會 寄 附 金

日本エスペラント學會ヨリ	松田周次	.70	松原八郎	1.00
.....60.00	野原休一	5.00	鈴木辰男	2.50
主催地以外ノ參加者ヨリ	佐々城佑	1.00	笹原茂三郎	2.50
.....66.05	石黒捷三郎	.50	多木燐太郎	1.00
〔内譯〕	竹中治助	1.40	田中耕三	.50

山本佐三	.40
尾田藤吾	.70
木村金松	1.00
丹羽正久	1.00
關本至	1.30
由比忠之進	4.00
小坂狷二	20.00
眞山政之	1.00
西田英夫	2.40
金子美雄	1.00
成田常次郎	1.00
松本健一	1.00
高松重光	1.05
應和進	.70
細川卓郎	1.00
土師孝三郎	2.20
小野田幸雄	.50
白木欽松	1.70
西原武宣	1.00
中原脩司	2.50
笠井四郎	.50

網谷金次郎	2.00
増田留五郎	2.00
主僅地側ヨリ…………… 07.64	
〔内譯〕	
伊藤幸一	20.00
城戸崎益敏	10.00
松原雪江	10.00
隅谷信三	10.00
川崎直一	5.00
桑原利秀	10.50
小田利三郎	20.00
ヒワマサズミ	5.00
小泉昇	2.70
飯田精次郎	1.00
米田徳次郎	20.00
兒島壯一	5.00
進藤靜太郎	20.00
池川清	20.00
村上廣一	.24
田中達雄	2.00

金滄振	1.00
横田登實夫	.35
中目覺	.85
田中きみ子	.80
田中善十郎	5.00
濱田禎造	1.00
奥村林藏	1.00
里吉重時	1.00
里吉友枝	2.00
佐野幸代	1.00
鶴我盛隆	1.00
ササキスケマサ	9.00
平松昌子	.50
隅田益子	1.70
大村幸治郎	.50
三品幸	2.70
竹内潮	10.00
俣野四郎	2.00
村上トミエ	1.00
北野照雄	1.80
匿名氏	2.00

大會參加申込者 (*印不參者)

*植田半次 (大牟田)	*後藤敏 (山形)	*關本至 (京都)
松田周次 (金澤)	*青木武造 (東京)	*由比忠之進 (滿洲)
月本喜多治 (神戸)	*山口博威 (岡山縣)	伊藤幸一 (大阪)
橋詰直英 (")	*瀬川明 (姫路)	城戸崎益敏 (")
前田健一 (")	竹中治助 (名古屋)	城戸崎雛子 (")
宮本新治 (")	*田中正美 (和歌山縣)	松原雪江 (")
坂内正二 (")	藤田穠三 (高知)	隅谷信三 (")
川村信一郎 (東京)	高見宏 (東京)	川崎直一 (")
*川村秀子 (")	松原八郎 (岸和田)	桑原利秀 (")
*森惠美子 (")	*吉田弘二 (名古屋)	小田利三郎 (")
五井義雄 (桑名)	鈴木辰男 (東京)	ヒワマサズミ (")
*五井修 (")	笹原茂三郎 (")	小泉昇 (")
野原休一 (下關)	多木燐太郎 (兵庫縣)	飯田精次郎 (")
中西義雄 (岸和田)	上谷良吉 (西宮)	*小川正 (")
三宅史平 (東京)	*江口晋吉 (小樽)	上月美弘 (")
*大前弘三 (京都)	中川勝八 (宮崎)	藤間林太郎 (")
*佐々城佑 (東京)	*田中耕三 (堺)	米田徳次郎 (")
*加藤精一 (名古屋)	柴山慶 (京都)	マキヤマキンスケ (")
柳原弘 (岐阜)	*河合貞吉 (東京)	*川崎さくら (")
内藤爲一 (名古屋)	野島安太郎 (京都)	橋田慶藏 (")
*田中貞美 (滿洲)	山本佐三 (滋賀縣)	池田一三 (")
*石黒捷三郎 (東京)	*尾田藤吾 (堺)	多田つや (")
*根本潔 (")	木村金松 (京都)	兒島壯一 (")
*宇佐見義一 (名古屋)	*丹羽正久 (名古屋)	進藤靜太郎 (")

(367) 4

宮崎晃一(大阪) *高橋運(大阪) *石堂清俊(")
 *伊藤正文(") 草刈猛(") *増田英一(")
 *笠井四郎(尼崎) 安田龍夫(")
 *網谷金次郎(堺) *吉田太市(東京)

参加申込者府県別 (*不在参加者)

大阪府	105 (*26)	和歌山縣	3 (*2)	奈良縣	1
東京府	30 (*16)	石川縣	2	岐阜縣	1
兵庫縣	20 (*3)	新潟縣	2	徳島縣	1
愛知縣	17 (*7)	大分縣	2	高知縣	1
京都府	16 (*2)	三重縣	2 (*1)	北海道	1 (*1)
特滿洲國	7 (*7)	宮崎縣	2 (*1)	朝鮮	1 (*1)
福岡縣	4 (*3)	岡山縣	2 (*2)	山形縣	1 (*1)
山口縣	3	埼玉縣	1	参加申込者	229 (*74)名
廣島縣	3 (*1)	滋賀縣	1	實際参加者	155 名

大 會 役 員

名譽顧問	大阪帝大總長	楠本長三郎	同	大阪商工會議所 會頭	安宅彌吉
同	大阪商大學長	河田嗣郎	同	大阪商工會議所 副會頭	片岡安
同	大阪外語校長	葉山萬次郎	同	栗本鐵工所 社長	栗本勇之助
同	大阪商船社長	村田省藏	同	貴族院議員	佐々木八十八
同	大阪朝日新聞社長	上野精一	會頭	大阪外語教授	中目覺
副會頭	城戸崎雛子	大阪市商工課長	草刈孟	進藤靜太郎	
事務局	兒島壯一	桑原利秀			
總務部	伊藤幸一	小田利三郎	多田ツヤ	ヒワ マサズミ	
會計部	城戸崎益敏	金滄振	池田一三		
會議部(受付)	ヒワ マサズミ	城戸崎益敏	黒崎誠	多田ツヤ	飯田精次郎
	富永たも	林正之助	松原雪江	山本義郎	(案内) 三品 幸
	川崎直一	伊藤幸一	桑原利秀	(會場) 小泉 昇	田中達雄
	山岡明一	竹内 潮	村上廣一	川上義雄	(會議) 進藤靜太郎
	桑原利秀	藤間常太郎	伊藤幸一	(記録) 貫名美隆	隅谷信三
	松田勝彦	(分科會)	松原雪江	俣野四郎	桑原利秀
觀光部	池川 清	兒島壯一	(宿舍) 兒島壯一	上月美弘	田中達雄
	(觀光艇)	田中達雄	(プラネタリウム)	隅谷信三	
大阪市觀光係	(宿舍)	金田吏員	(觀光艇)	西田吏員	(プラネタリウム)
	貴志吏員	(萬案内)	貴志吏員	西田吏員	

エスぺラント講習所

昭和 14 年度第 3 期生募集

御友人を御勧誘ください！

初 等 科	期 間	8 月 7 日から 10 月 12 日まで
	時 間	毎週月、木曜午後 7 時から 9 時まで
	講 師	交 渉 中
	教 材	エスぺラント讀本 (30 錢)
	會 費	全期分前納 3 圓 (本會會員は 2 圓 50 錢)
中 等 科	期 間	8 月 8 日から 10 月 13 日まで
	時 間	毎週火、金曜午後 7 時から 9 時まで
	講 師	學會評議員 大崎和夫氏
	教 材	エスぺラント中等讀本 (30 錢)
	會 費	全期分前納 3 圓 (本會會員は 2 圓 50 錢)
高 等 科	期 間	8 月 12 日から 12 月 23 日まで
	時 間	毎週土曜日午後 7 時から 9 時まで
	講 師	學會主事 三宅史平氏
	教 材	ザメンホフ讀本 (50 錢)
	會 費	全期分前納 4 圓 (または 2 圓づつ 2 回に分) (本會會員は全期前納 3 圓)

會 場 本會講堂
申 込 開講當日受付 (なるべく前日までにハガキでお申込みおきください)。

財團法人日本エスぺラント學會

本郷區元町1丁目13 市電本郷元町下車文化アパート横入る

☆特典 本學會講習所修了者は、エスぺラント普通學力檢定を無試験で受けることができる。

新撰和エス辭典 岡本好次編 上製 80 錢・送料 6 錢 並製 60 錢・送料 6 錢

新撰和エス辭典 岡本好次編 800 ペイヂ 2 圓 0 錢・送料 6 錢

エスぺラント案内 城戸崎益敏著 知識・文法・讀み物 30 錢・送料 3 錢

大學・中庸 野原休一譯 60 錢・送料 6 錢 孝經 野原休一譯 3 錢・送料 3 錢

惜しみなく愛は奪ふ 有島武郎著・東宮豊達譯 75 錢・送料 6 錢

ヴェルダ・カルト 石原榮三郎著・山中英男譯 1 圓・送料 6 錢

霧の中 山本有三著・露木清彦譯——パリで放送好評のラジオ劇——15 錢・送料 3 錢

海神丸 野上彌生子著・大崎和夫譯 40 錢・送料 錢 財團法人日本エスぺラント學會

倫敦塔 夏目漱石著・西 成甫譯 15 錢・送料 錢 東京本郷元町1丁目13 振替東京 11325 番
電話小石川 5415 番

LA REVUO ORIENTA
Monate eldonata de
Japana Esperanto-Instituto
Japanujo, TOKIO, Hongo-Motomati
Abonkotizo: 4 jen.

「日本書紀」第五編 近日出來！

第一編	一圓二十錢・送料六錢
第二編	一圓二十錢・送料九錢
第三編	一圓二十錢・送料九錢
第四編	一圓八十錢・送料十錢

昭和七年一月十二日 第三種郵便物認可
昭和十四年七月十日 印刷
昭和十四年八月一日發行 每月一回一日發行

「エスペラント」第七年 第八號

定價二十錢（送料五厘）